合 織 糸 ・ 合 織 混 紡 糸



田村紡績株式会社

社 長 田　村　正　衛

四日市市東茂福町 10 — 17
TEL 0593—65—2156 (代表)
郵便番号　5 1 2

日本、11位に終わる　優勝はユーゴ

～ミュンヘン・オリンピック～

第20回オリンピック大会ハンドボール競技は8月30日（大会第5日）から9月11日までミュンヘン・スポーツホール（一万二千人収容）を主会場にして国際ハンドボール連盟加盟54ケ国のなかから選び抜かれた16ケ国が参加して行われた。

アジア代表の日本は予選リーグD組に出場、「初参加、初入賞」を目標に健闘した。

第1戦（8月30日・ギョッピゲン）は優勝候補の最右翼にあげられていたユーゴスラビアと激戦を展開、互角にわたりあったものの14―20で力つき、初陣を飾れなかった。

第2戦（9月1日・ボブリンゲン）はハンガリーと対戦、立ちあがりの失点を追いかけ、後半一気に逆転のチャンスをつかんだかに見えたが、終盤、懸念された身長差が攻防両面であらわれ12―20で敗退、準決勝リーグ（ベストエイト）進出の道をたたれた。

予選最終戦（3日・アウグスブルグ）はアメリカと顔を合せこれまでの対戦記録から楽勝を予想されたが、アメリカは190cm台の長身選手8人や〝ハンドボールの常識〟を超えたトリッキーなパスを見せる黒人選手などを揃えて陣容を一新、日本は立ちあがりから苦戦を強いられた。しかし後半一気に5ゴールして20―16で勝ち、オリンピックで初の白星をあげた。

この結果、予選リーグの成績は1勝2敗（D組3位）となり9～12位決定トーナメントにまわった。

日本はまずノルウェーと対戦（7日・ミュンヘン）。これまで2勝の実績から有利とみられたが、前半の1点差をキープできず17―19と逆転負け。前回の世界選手権で得た「10位」を確保できなくなった。

11位をかけたアイスランドとの試合（9日・ミュンヘン）は一進一退の大接戦から木野の逆転シュートで19―18と勝利を握った。

注目の金メダル争いは日本などを破って勝ちあがったユーゴスラビアとチェコスロバキアが一万二千の大観衆が見守る中で対決、21―16でユーゴが勝ち感激の初優勝を飾った。世界チャンピオンのルーマニアは3位。ベルリン大会の勝者（11人制）で今回のホスト国西ドイツは6位、昨秋来日のスウェーデンは7位だった。

全力つくした日本代表

日本協会理事長　荒川　清　美

大会全日程44戦のうち予選リーグで重なりあった18試合を除きすべてのゲームを観戦したが卒直にいってヨーロッパ、それも特に東欧圏諸国の強さ、巧さは驚嘆すべきものがあった。

そうしたなかで日本代表は本当によくやってくれたと思う。

斯界宿願のオリンピック出場国内における期待の大きさからすればベストエイトの壁を突き破れなかったのは誠に申し訳けないことであり、多くの先輩、若い選手諸君、関係者諸賢の声援を裏切るものだが、日本の代表として、アジアの代表として12名の選手は力の限り戦ったことを報告したい。

国内ばかりでなく、我国への注目は国際ハンドボール連盟（IHF）筋でも強いものがあり、4会場で分散して開催された第一日の対ユーゴ戦には他地区でソビエト×デンマーク、ルーマニア×ノルウエーといった好カードが行われていたにも抱らず、エミール・ホルル技術委員長をはじめIHF技術畑のほとんど全員が顔を揃え、日本のプレーを注視していた。

日本と東欧諸国との差は一言でいえば体力、技術、戦術各面における多彩さであろうか。それとディフェンスにおけるすさまじいばかりの〝動き〟である。

上位国の各選手は実に順応度が高く、しかもすべてに〝一かたまり〟となったプレーをみせる。波状的な攻撃であり守備なのだ。優勝したユーゴは、とりわけ秀れた感覚と能力を示し、現代ハンドボールの〝完成〟といっても過言にはなるまい。

今回は日本も相手国をかなり研究して臨んだが、各国の対日本策戦も綿密で、逆襲からの速攻をうけぬため、日本戦は極度にシュートの乱発をさけていたことなどその一例であろう。

ところで、大会はさすがに本場ヨーロッパでの開催とあって熱狂的なムードのうちに進められ、特にミュンヘンに集結してからの5日間は連日一万をこすファンを動員、ハンドボールの人気を誇示した。

日本の進境、アメリカの成長はともすればヨーロッパ偏重といわれたハンドボールをグローバルなスポーツとして認識させる大きな要因となり、国際関係筋の評価は高まった。（談・文責編集部。9月16日、体協で）

「ハンドボール」

10月号（第102号）目次

【表紙写真】ミュンヘンオリンピックの9位決定トーナメント予備戦、日本×ノルウェー、野田絶妙のシュート決める。

◎9～12位決定トーナメント

予選リーグで健闘しながらベストエイト入りを逸した各組3位国による9～12位決定トーナメントは日本、ポーランド、アイスランド、ノルウエーによって9月7日から開始された。

日本、前半のリード空し

9～12位決定トーナメント予備戦第2試合・ノルウエー（ヨーロッパ第2代表）との試合は9月7日午後9時15分＝日本時間8日午前5時15分からミュンヘンオリンピック公園・スポーツホールで行われた。審判＝フォーク、ロスマニス（西ドイツ）、観衆＝約三千。

ノルウエー 19（11－8 8－9）17 日本

	【ノルウエー】	身長	得
GK	バイ	192	0
GK	オクセター	189	5
FP	アンクレ	193	3
FP	ライナートセン	187	2
FP	I・ハンセン	187	3
FP	ローズ	186	1
FP	ハバーベン	180	3
FP	T・ハンセン	186	5
FP	ウルダル	179	2
7MT			(4) 19

得	【日本】	
0	本田	GK
0	下里	GK
1	木野	FP
2	近森	FP
1	飯田	FP
4	野田	FP
0	早川	FP
5	有永	FP
3	中井	FP
0	氷海	FP
0	新実	FP
1	佐々木	FP
17（1）		7MT

（氏名横の数字は身長(cm)。日本選手の身長は4頁）

▽反則退場 ハンセン＝2分間1回、5分間1回。▽警告 有永、ハンセン2回、アンクレ

後記 荻野 寛伸（NHK・TVディレクター）

○……日本が1点を入れるとノルウエーがすぐ返す。こんな繰り返しがつづき前半だけでタイスコアが8回。26分8－8のあとの7MTをローズが落とし、逆襲から20秒後近森がゲット9－8とした時は日本へ勝運が向いたかにみえたところが、日本は後半の立ちあがり攻守ともまったくリズムを崩し攻めては凡ミス、守ってもディフェンスに粘りを欠いて1分7MTで9－9とされてからたてつづけにゴールを奪われ14分には16－9と差をつけられてしまった。この間の無策はどうしたことか。

○……14分野田のゲットで後半初のポイントをあげてからようやく調子をとりもどし、ノルウエーの2本の7MT失敗などもあり必死の反撃を試みたのだが、29分2点差までが精いっぱい。あまりにも後半の立ちあがりにうけた傷口が大きかった。前半たえず先手を許しながらピッタリくっついていたノルウエーと崩れだすと止まらない日本の試合ぶりが対象的。

○……個々の選手では、ノルウエーのT・ハンセンが187cmと大柄なわりにアンダーハンドシュートやバウンズシュートを射ち分ける多彩な攻撃力で目立ち、日本では中井の成長と有永の闘志、野田の相変らずの巧技が光った。

○……日本はベストエイト入りを逸したものの、前回の世界選手権で10位ということを考えれば「9位」にもう少し執着した試合ぶりを示してもよかったのではなかろうか。気の早い話だが9～10位と11位ではモントリオール選考時(国内)にひびいてくると思う。

【写真は日本×ノルウエー戦から＝共同通信社提供】

▽9～12位決定トーナメント予備戦第1試合（7日・ミュンヘン）

ポーランド 20（10－10 10－7）17 アイスランド

ノルウエー、左腕に喪章

日本戦のノルウエーベンチはわずか9選手。パレスチナゲリラによるテロ事件で犠牲者がでたショックから7選手が出場辞退を監督に申し出、9選手も左腕に黒いリボンの喪章をつけて試合へ臨んだ試合後の記者会見での同国役員によると出場した9人のうち3人も渋っていたのだという。

日本－ノルウエー ランニングスコア

	【日本】	【ノルウエー】
4分		①
5分	①近森	
6分		②
7分	②中井	
9分	③中井	
10分		③
11分		④(7)
12分	④有永	
13分		⑤
15分	⑤飯田	
17分	⑥中井	
18分		⑥
21分		⑦
22分	⑦有永	
25分	⑧有永	
26分		⑧
28分	⑨近森	
1分		⑨(7)
2分		⑩
3分		⑪
4分		⑫
9分		⑬
10分		⑭
13分		⑮
14分		⑯(7)
14分15秒	⑩野田	
15分	⑪野田	
16分		⑰
17分	⑫野田	
21分	⑬有永	
22分		⑱
23分	⑭有永	
25分	⑮佐々木	
26分		⑲(7)
28分	⑯木野(7)	
29分	⑰野田	

(7)は7MTを示す

日本、アイスランドにせり勝つ

11位決定戦・アイスランド（ヨーロッパ第3代表）との試合は9月9日午後5時＝日本時間10日午前1時からミュンヘンオリンピック公園・スポーツホールで行われた。審判＝シデア、シルリジアーヌ（ルーマニア）、観衆＝約九千。

日本 19（8－6、11－12）18 アイスランド

【日本】		得	【アイスランド】		得
GK	本田	0	GK	フィンボガソン.180	0
GK	下里	0	FP	スカラソン.178	1
FP	木野	3	FP	ビョーグビソン.178	2
FP	近森	4	FP	シグスティンソン.180	1
FP	野田	1	FP	O・ジョンソン.191	1
FP	有永	4	FP	ガンナーソン.186	0
FP	氷海	3	FP	ホールスティンソン.185	7
FP	早川	0	FP	アクセルソン.190	0
FP	新実	0	FP	オグムンドソン.187	1
FP	佐々木	0	FP	マグヌソン.187	5
FP	飯田	4	FP	グロンダール.189	0
FP	中井	0			
		19（0）7MT		（2）	18

▽反則退場　ビョーグビソン＝2分間、ジョンソン＝2分間。

▽警告　木野、ジョンソン、ホールスティンソン。

○……追いつ追われつの熱戦となったが、日本は18－18から29分16秒木野がジャンプシュートを決めアイスランドに競り勝った。

前半、日本は身長のあるアイスランドを意識して正面からのシュートはやや高く、バーをはずれることが多かった。しかし、身の軽いコンビネーションプレーや速攻でやや動きの鈍いアイスランドに対抗した。

○……後半に入ると、日本は多彩な攻めでアイスランドを揺さぶった。17分を過ぎ、有永がジャンプシュートを決めついに15－15のタイスコア。

こうなると調子に乗った日本に分が出てくる。

特に16－16のタイからGK本田の動きがよく、4本の強烈なシュートを判断のいい守りで防いだ。

【共同通信戦評から】

日本一アイスランド ランニングスコア

	【日本】	【アイスランド】
1分		①
2分		②
3分	①飯田	
4分	②有永	
5分		③
6分		④
9分	③有永	
11分		
13分	④近森	
14分	⑤氷海	
16分		⑥
17分	⑥近森	
19分	⑦飯田	
19分30秒		⑦(7)
20分	⑧野田	
22分	⑨近森	
23分		⑧
24分		⑨
24分18秒	⑩木野	
25分		⑩
27分		⑪(7)
29分	⑪飯田	
30分		⑫
5分		⑬
7分	⑫有永	
8分		⑭
9分	⑬飯田	
10分	⑭氷海	
12分		⑮
18分	⑯有永	
20分		⑯
21分	⑯氷海	
23分	⑰木野	
27分		⑰
28分	⑱近森	
29分		⑱
29分16秒	⑲木野	

(7)は7MTを示す

日本の技術、充分に通用

竹野コーチの話

アイスランド戦終了後、竹野孝昭コーチ（補助役員）は今回の大会について次のように語った。

△

各国とも36年ぶりのチャンスということから、我々の想像以上のレベルアップをとげており、国際交流の場から遠い日本の地理的条件の不運をつくづく感じた。

また、世界選手権などとムードが違い、このような舞台で実力を存分に発揮できない日本選手の〝経験不足〟も苦戦の原因だったと思う。

全般的なふり返りではケガ人が多かったのが誤算となった。特にスカイプレーの軸となる佐々木（左足首ねんざ）、速いプレーを得意とする早川（右手首骨折）がベストコンディションでないまま大会を迎え、木野、中井、近森らも故障に見舞われた。

体力的な差もまだ解決していない。日本が世界の上位へ食いこむには身長で平均5cmぐらい今のチームより高くなる必要があろう。

しかし、日本の技術が充分通用する自信はもったし、大型選手がいかに育ち、スピードプレーにいっそうみがきをかけていけば、ごく近い将来、世界のトップクラスに仲間入りできる。

▽9・10位決定戦＝11頁参照

ノルウェー　23－20　ポーランド

木野、39試合連続得点

全日本・木野実選手（湧永薬品）は、オリンピック5試合と前哨のアイスランド戦の計6試合で15得点をあげ、41年10月3日の対中国戦（東京）以来つづけている公式国際試合連続得点記録を「39」に伸ばし通算得点は151ゴールとなった。

ミュンヘンに拾う

★人気集めた応援団　日本の試合にきまって登場したのが日の丸を描いた太鼓を打ち鳴らす応援団。ミュンヘンまで出かけた日本協会関係者や在留邦人が一かたまりとなってのものだが、中心の10人はそろいの法被（はっぴ）という念のいりよう。

日程が進むにつれ外人たちの間にも評判となり、たまに応援が途切れると「どうした？」と心配げに声をかけられるほどの人気…。

★東選手が手伝い　戦うことに精いっぱいの12選手。諸連絡など雑務に追われる村田、竹野両氏。そんな〝人手不足〟のところへ全日本の東一敏（大崎電気）選手が試合見学のため来独、早速チームの要望で即席マネジャーとなった。気心の知れた援軍を得て役員選手も大助かり。このほか元世界選手権代表の飯端寿昭氏（関学出）も姿をみせ世話をやいていた。

★ドーピング検査　ハンドボール初のドーピングテスト（興奮剤検査）は予想以上に厳しく、試合が終るや即座に検査室へ連行？された。尿検査を受ける選手は抽せんということだったが、日本チームでは飯田、氷海選手が各2回あたり、中井、早川、佐々木選手らも〝名残りの品〟をミュンヘンへ置いて来た。

◎予選リーグD組

参加16ケ国を4ケ国づつ4組に分けた予選リーグは8月30、9月1、3の3日間ミュンヘン近郊の4都市で行われ日本はD組に出場した。

前半互角の健闘実らず

第1戦・ユーゴスラビア（世界選手権3位）との試合は8月30日午後7時＝日本時間31日午前3時からギョッピンゲン・スポーツホールで行われた。審判＝ヤーネルスタム、ラルソン（スウェーデン）観衆＝約一千八百

ユーゴ 20（9－7、11－7）14 日本

得	【日本】	身長		【ユーゴ】	身長	得
0	本田	179	GK	アルスラナジク	189	0
0	下里	184	GK	ジビコビク	180	0
3	木野	182	FP	ブリバニク	186	1
2	近森	183	FP	ホルバト	190	3
4	野田	169	FP	ラブルニク	192	4
2	飯田	187	FP	ミルヤク	189	2
2	有永	187	FP	ポプラヤク	183	4
0	氷海	180	FP	ポクビク	181	1
1	中井	180	FP	ラザレビック	188	3
0	早川	180	FP	カラリク	184	0
0	新実	180	FP	ビドビク	187	0
0	佐々木	170	FP	メスコビク	185	2
14	（3）		7MT	（2）		20

（氏名横の数字は身長cm）

▽反則退場　ポポビク＝2分間、▽警告、佐々木、ポポビク、ポポビク、ラブルニク、ラザレビク

観戦記

荒川 清美（日本協会理事長）

○……日本は立ちあがりすぐ野田が相手ディフェンスを巧みに誘いこんで7MT、近森が決めて幸先よいスタートを切ったが、ユーゴはすぐにラブルニクの豪快なロングシュートなどで逆転、日本もひるまず有永、木野らがジャンプショットからゴールを決め7分3－3とした。

このあたり日本はむしろ押し気味だったのだが、10分をすぎるとユーゴは早いテンポで射ちこみ、連続3ゴール、力の差をみせた。

○……日本も中井、野田が場内をわかす好シュートで追いあげすばらしい内容となったのだが22分5－7から手痛い7MTで3点差、すぐに日本も7MTを得たあと有永のシュートで3たび1点差としたのだが、残り5分間にラブルニク、ポクラヤク、ミルヤクのロングシュートを受け引きはなされたのがこたえた。

○……後半開始とともにユーゴは一気にスパートして2分ラザレビクの豪快な倒れこみのあとポクラヤク、ホルバトらが矢次早にゲット、日本は連続4失点で7－15とされてしまった。

前半25分から後半10分までの15分間にパワーの差が露われたといえるだろう。

日本は最後まで粘り後半15分10－16、20分12－17としたのだが大勢をくつがえすまでにはいたらず惜敗した。

○……敗因としてあげられるのは

(1) 日本はスピードという点では見劣りしなかったが、動く範囲がせまく、そのためシュートチャンスをあまりつかむことができなかった。

(2) ユーゴの防禦陣形は実に変化に富み、一線かと思うと三線になるなど相手の動きを看破する能力に全員がたけていることを示した

日本はポストプレー、スカイプレーを封じこまれてしまった。

(3) いぜん体格差、体力差もあるようだ。体格に優るユーゴは攻撃に際しては腰で日本のディフェンスを押しつけておいて崩し、それからシュートを射ってくる。

身体での〝圧倒〟が一ケ所でならともかくすべてのプレーで示されるのだから始末におえない。

○……日本としては、今後個人の動き～攻撃面積、守備面積～を拡大する訓練をつまねばいけないと思う。また、体格差、長身ディフェンスのブロックを意識してシュートが浮きあがっていたのも外人相手の場合、考えなければならないだろう。

日本――ユーゴ ランニングスコア

	【日本】	【ユーゴ】
1分	①近森(7)	
2分		①
4分		②
5分	②有永	
6分		③
7分	③木野	
8分		④
10分		⑤
12分		⑥
15分	④中井	
17分	⑤野田	
18分		⑦
22分		⑧(7)
23分	⑥野田(7)	
24分	⑦有永	
25分		⑨
27分		⑩
29分		⑪
2分		⑫
6分		⑬
7分		⑭
8分		⑮
9分	⑧近森	
12分		⑯
13分	⑨木野	
15分	⑩野田(7)	
16分		⑰(7)
17分	⑪飯田	
19分	⑫飯田	
20分		⑱
21分		⑲
22分	⑬木野	
25分		⑳
27分	⑭野田	

(7)は7MTを示す

ハンガリーの力に届す

第2戦・ハンガリー（世界選手権8位）との試合は9月1日午後8時15分＝日本時間2日午前4時15分からボブリンゲン総合体育館で行われた。

ハンガリー 20（10－5、10－7）12 日本

○……日本とハンガリーはこれまで1勝2敗1分、やりにくい相手ではなかったハズだが、立ちあが

得	【日本】		【ハンガリー】		得
0	本田	GK	ホルバト	.185	0
0	下里	GK	バルタロス	.182	0
3	近森	FP	カロ	.187	2
2	中井	FP	K・バス	.194	1
3	木野	FP	バルガ	.189	6
2	野田	FP	マロシ	.179	4
1	有永	FP	S・バス	.192	1
0	飯田	FP	シモ	.185	2
1	氷海	FP	ハルカ	.180	0
0	新実	FP	スリチラー	.183	4
0	早川	FP			
0	佐々木	FP			
12	（0）	7MT	（2）		20

【公式記録未着】

りいきなり4点を奪われるという拙い試合運びだった。

いずれもハンガリーの高い打点から投げおろすようなシュートにゴールを割られたもので、この身長差は日本の攻撃面でも〝障碍〟になっていた。

○……日本は10分ようやく、有永がポストから巧くチャンスをつかんで1点をあげ、20分をすぎてから木野、中井らのゲットで点差をつめはじめた。

後半に入って日本は守りもハンガリーの動きになれ9―12まで追いこみ、大いに期待をもたせたのだが、ハンガリーはそのあとマロシ、バルガらが巧みな変化攻撃をおりこんで、日本ゴールを襲い、一気に加点。予想外の大差がついてしまった。

○……第1戦（対ユーゴ）といい、今日といい日本は、調子の波がはげしすぎ、特に一つの失点からズルズルと連続ゴールを許し傷口を拡げてしまうのは拙い。巧技を活かしてある程度の反発力があるのだからディフェンスに一工夫欲しい。

日本はこれで2敗、準決勝リーグ進出ののぞみをたたれた。（IHF戦評から）

アメリカから初の勝利

第3戦・アメリカ（アメリカ大陸代表）との試合は9月3日午後9時15分＝日本時間4日午前5時15分からアウグスブルグ・スポーツホールで行われた。審判＝バートジンガー、ガブリエル（スイス）

観衆＝約一千五百

日本 20（11―9、9―7）16 アメリカ

得	【日本】		【アメリカ】		得
0	本田	GK	リブニヤク	.174	0
0	下里	GK	エデス	.183	0
7	飯田	FP	アブラハムソン	.190	4
1	有永	FP	フェルカート	.194	1
3	近森	FP	ロジャース	.191	4
4	野田	FP	ベーカー	.196	2
2	木野	FP	シュレジンガー	.185	0
2	中井	FP	バークホルツ	.183	3
0	佐々木	FP	スパークス	.191	1
1	氷海	FP	マシューズ	.183	0
0	新実	FP	ディカロゲロ	.183	1
0	早川	FP	アブラム	.193	0
20	（0）	7MT	（2）		16

▽反則退場　木野＝2分間2回、新実＝2分間、スパークス＝2分間、ベーカー＝2分間。

▽警告、木野、バークホルツ、シュレジンガー、フェルカート。

○……日本は楽に勝てる試合を苦労した。7MTを2回とも失敗したり、焦って強引なシュートを放ったりしなければ、点差はもっと開いたはず。パスミスも目立った。

アメリカの場合も同じミスがあったのでなんとか勝てた。

○……日本は立ちあがり攻めのまずさから1―4とリードされたが木野、近森のシュート、飯田の3連続得点で一気に6―4と逆転した。しかしアメリカの反撃ですぐ同点とされ、一進一退を繰り返して前半は9―9の同スコア。

○……後半に入り氷海、野田のスカイプレー、アクロバットシュートなどで5連続ゴールして、やっと大勢を決めた。日本選手の中では7得点をあげた飯田と、7MTを含め幾多の強シュートを防いだGK本田の活躍が目立った。（共同通信戦評を転載）

ユーゴ、ハンガリー破る

◇D組このほかの試合

ハンガリー 28（12―7、16―8）15 アメリカ

▽ハンガリー＝I・バルガ13、マロシ5、S・バス、シモ各4、カロ、アドルヤン各1

▽アメリカ＝ロジャース、シェルジンガー各4、アブラハムソン、バーカー、ボエルケルト各2、マシューズ

ユーゴ 25（14―6、11―9）15 アメリカ

ユーゴ 18（9―8、9―8）16 ハンガリー

得	【ユーゴ】		【ハンガリー】	得
0	アルスラナジク	GK	ホルバト	0
0	ゾルコ	GK	バルタロス	0
2	プリパニク	FP	カロ	3
0	ブアフリク	FP	K・バス	1
0	カラリク	FP	バルガ	5
8	ラブルニク	FP	マロシ	1
1	ミスコビク	FP	S・バス	3
1	ホルバト	FP	シモ	1
2	ポクラヤク	FP	アドルヤン	0
0	ミルヤク	FP	ハルカ	0
4	ラザレビク	FP	タカクス	0
0	ポポビク	FP	スティルラー	2
18	（4）	7MT	（6）	16

（この記録は準決勝リーグに適用）

国際経験の差、ここでも

○……日本とヨーロッパの地域差については常にいわれていることだが、キャリアのバロメーターともいうべき公式国際試合出場数でもそれがはっきり表れた。

今回選手登録された16ケ国253人のうち、ミュンヘン直前までに95試合以上という選手が8ケ国23人もいる。

○……最高はマロシ（ハンガリー28才、179㎝）の145試合で、同選手はこの大会で150の大台をこえた。このほかおそらく史上初だろう。このほかラングホフ（東ドイツ、33才、185㎝）の139、アドルヤン（ハンガリー、34才、192㎝）の135、ルブキング（西ドイツ、31才、185㎝）の133が主なところ。日本の最高は木野、近森の39（ミュンヘン終了現在＝ともに全日本6年目）というのだから、この2人が100試合をこすのにはあと9年近くかかる勘定だ。

日本――アメリカ ランニングスコア

	【日本】	【アメリカ】
2分		①
2分10秒	①有永	
5分		②
8分		③
9分		④
9分20秒	②木野	
12分	③近森	
17分	④飯田	
19分	⑤飯田	
20分	⑥飯田	
21分		⑤
22分		⑥
23分	⑦近森	
24分	⑧飯田	
25分		⑦(7)
26分		⑧
27分	⑨飯田	
28分		⑨

	【日本】	【アメリカ】
1分	⑩氷海	
4分	⑪野田	
6分	⑫中井	
7分	⑬飯田	
9分	⑭飯田	
12分		⑩
13分		⑪(7)
14分		⑫
18分	⑮野田	
22分	⑯中井	
24分		⑬
26分	⑰木野	
27分	⑱近森	
28分	⑲野田	
28分20秒		⑭
29分	⑳野田	
29分40秒		⑮
30分		⑯

(7)は7MTを示す

開発せよ、日本独得の戦法

11位の教訓

史上最強、斯界の全力を注いで送り出した日本代表チームだったが、またしてもヨーロッパの厚い壁にはね返されてしまった。

日本の試合をみた国際ハンドボール連盟(IHF)のエミール・ホルル技術委員長は「昨秋のアジア予選よりいちだんと強くなった」と賞さんしたそうだが、それだけの評価を得ながら「11位」という結果はどう分析したらよいのだろうか。

予想以上の充実ぶり ユーゴ、ハンガリー

「ユーゴ、ハンガリーは強かった。それ以外に〝敗因〟はない」荒川清美日本協会理事長の帰国談は言葉少なである。

この言葉の裏には〝日本は全力をつくした〟という評価と、ユーゴ、ハンガリーの戦力を過少にみつもった〝誤算の反省〟がかくされている。

今回の組み合せ(予選リーグ)は日本にとってまことにラッキーであった。

村田弘オリンピック対策部長は「16ケ国のうち、好きな相手を選べばユーゴ、ハンガリー、アメリカの3ケ国……」といったほどだ苦手意識をもつソビエト、チェコ、ルーマニアなどをさけられただけでも気が楽だったのである。

もちろん、ユーゴ、ハンガリーが2年前に顔を合せた時と同じ力だとは誰も想っていなかった。

その向上度を最大限にみこんでもなお日本は勝算をはじき出すところまで達していた、のである。竹野奉昭コーチは「勝てないまでも引き分けられる」とみていた。

結果からすれば日本側の目算はすべて甘かった、のだがそれを責めることはできないと思う。

「日本は2年遅れた……」本田洋選手の感想は悲吐なひびきをもっていた。

大誤算、ハンガリーとの敗戦

特にユーゴの充実ぶりは驚くべきものがあったようだ。

むしろ、14—20という敗戦を善戦とみる人が多く、この日にかけユーゴに対する自信があったからこそ6点差に留め得たという声もおきているほど。ユーゴが優勝したあといっそうその声は強い。

六分の利といわれたハンガリー戦が意外の大差に終ったのも大誤算で、今回の成績に対する批判もこの一戦に集中している感じがしないでもない。

実は、ハンガリーも初めから焦点をユーゴ一本にしぼっていたといわれる。つまり日本、アメリカからの各1勝は確実とみていたのだろう。

それが、日本のユーゴとの試合ぶりをみて、日本への警戒心を強め、後半に入ると3台のビデオテープで日本のプレーを撮りまくっていた、という。

彼らがミーティングでそのテープを写し出し日本策戦を細かくねりあげたことは想像にかたくない

ユーゴに負けてやや気落ちした日本と、たずなを引きしめなおしたハンガリー。この差が第2戦に現れたとみるのはうがちすぎだろうか。

「9位」獲得を逃す

日本の関係者にとってもう一つ残念なのは、前回の世界選手権のランキング「10位」を確保できなかったことだ。

9位決定トーナメントの最初の相手はノルウェー。これまで2勝をしている相性のいい国だ。ここで勝ってさらに1勝を加えれば9位——ランクを一つあげて帰ることができた。しかしこのチャンスをつかみ切れずに終っている。この試合を観た人は「悔いの残る試合だ」といっている。

ノルウェーがかつてのノルウェーでなかったことは予選C組でルーマニアに14—18、西ドイツに15—15(引き分け)というスコアからも判るが、日本との対戦時点で日本が一歩ゆずらざるを得ぬ戦力、気力であったかどうか。惜しまれる1敗だ。これも誤算といえるだろう。

ある選手は「誤算というより情報力の弱さではないか」という。たしかにそれは日本の泣き所だ。

体格差いぜん縮らず

体格差がいぜん未解決というのは報道関係者の一致したみかたである。日本が対戦した5ケ国の体格(FP)をみてみよう。

	平均身長	同体重
ユーゴ	185・4	86・2
ハンガリー	185・5	82・5
アメリカ	189・4	84・7
ノルウェー	186・5	84・6
アイスランド	184・5	80・3
日本	179・8	75・9

長身者対策にかなりの時間をかけ、ディフェンス面ではその成果も現れた、といわれるが、攻撃面

では文字どおり「ヨーロッパの高く厚い壁」であったようだ。

日本のシュート成功率が35％強と16ケ国中下から2番目なこともそれを物語ってはいまいか。

大きくなったといわれる日本。それでも約5センチの差がある。

今回の〝敗因〟は2年の差であり5チンチの差でもあったのだ。

ひびくキャリアの乏しさ

竹野コーチは「国際経験の乏しさを痛感した」という。

国際経験とは一人々々のキャリアを指すのではなく、本場・ヨーロッパと孤島・日本の差を嘆いたものである。

バス一つで国境をこえ、強者を求めて転戦できるヨーロッパ諸国は試合のたびに腕をあげ得る。

例えば昨年1年間、IHFに登録された男子の公式国際試合は158試合で、このうちなんと140試合がヨーロッパ同士の対戦である。

国別にみるとルーマニアの23試合をトップにユーゴ、ハンガリー、チェコの22試合がつづく。

日本はスウェーデン4、イスラエル、韓国と各2。春のグンメルスバッハ戦を含めても9試合である。

この差が、もしすべてに影響してくるのだとしたら日本は半永久的に世界の最上位へ進出する足がかりをつかみ得ないのではなかろうか。

もちろん、公式国際試合だけがレベルアップにつながるものではないが、実戦をまじえなくても「各国を観る」チャンスがあるヨーロッパと日本とのハンデははっきりしている。

必死に情報を集め、机上で相手の実力を分析しても、所せんそれは楽観的な結論を導き出して終わることになろう。

環境好転以外に道なし？

この2年間、日本の努力は現在の環境下で最大限に払われたといえる。

ある理事は「これでダメならしかたがない」といっていたし「今回以上のメンバーと強化合宿は今後実現できないかもしれぬ」という声もあった。

「それ以上のことを他国がしていた」といってしまえばそれまでだが、日本協会としても万全を期したあとだけに、すぐに再出発策を打ち出すことは難しいとみなければならない。

一方、「185cm以上の選手が必要だとか、ロングシュートが弱いとか、ディフェンスがどうのといった問題ではない。日本のハンドボール環境が向上しない限り、ヨーロッパの壁は突破できまい」という悲観論が流れているのも事実である。

ブルガリア、スペイン、フランス、オーストリアなどの奮起を考えると今回の11位も安泰とはいい切れない。

ヨーロッパばかりではない。アメリカがいよいよ本腰を入れはじめた。本誌の常連寄稿家光嶋磯雄氏は「日米の差は試合経験だけ…」と厳しい採点をミュンヘンから伝えて来ている。アフリカ勢の意欲も無視できない。いや韓国だって、イスラエルだって侮りは許されまい。

ホルルIHF技術委員長は日本の成長を認めたというが、それは現在の日本の力とヨーロッパ列強の力と比べたうえで「よくやった」ということにほかならない。

考えよ〝日本〟の活きる道

日本ハンドボール界は極言すると四面楚(そ)歌だ。

日本選手の平均身長が185cmをこえた時、世界のレベルは190cm台となろう。日本とヨーロッパの地域差は物理的に縮らない。

となれば、一日も早く「孤島の生きかた」を探し出すべきではないか。

かつて本誌はスウェーデンの名手L・エリクソン選手の「日本には日本のハンドボールがあるハズだ。やたら東欧や西欧のハンドボールを採り入れても環境、体軀が違うのだから消化する限度がある」という言葉を伝えた。

アメリカは今回、バスケットボールのテクニックにアメリカンフットボールのタクティクを加味した独得のハンドボールを披露したという。西ドイツの有力コーチ・ケンパ氏はアメリカ協会に招かれて半年近く渡ったが「ドイツのハンドボールを教えてもなかなか受け入れようとしなかった」と親交のある荒川理事長にミュンヘンでこぼしたそうだ。

幸にして、全試合後竹野コーチは記者団に「日本の技術は充分世界に通用する」と語っている。行く道はけわしいがまったく閉ざされているわけではないのだ。

ヨーロッパの壁を打ちくだくにはどんなプレーが、どんな選手が有効なのか。世界に通じる日本のハンドボール、日本の戦法、日本のトレーニングを改めてねりあげる時期は今をおいて他にない。

そのためには、日本協会——日本ハンドボール界自体の体質改善も必要だろう。

12人の若者の貴重な体験によって日本ハンドボール界は新しいスタート台に立つことができた。これはミュンヘンオリンピックにおける最大の収穫である。

この特集に対する読者の御意見をお聞かせ下さい。（編集部）

決勝戦　ユーゴ完ぺきな攻守示す

金メダルを争う優勝戦は9月10日午後11時からミュンヘンオリンピック公園・スポーツホールで行われた。審判＝オブタル、ロディル（デンマーク）、観衆＝約一万二千。

ユーゴ 21（12—5、9—11）16 チェコ

得	【ユーゴ】		【チェコ】	得
0	チブコビック	GK	クラリク	0
0	アルラナジグ	GK	ポスピシル	0
0	プリバニク	FP	ベネス	4
0	ファフリック	FP	サトラパ	1
0	カラリク	FP	ヤリー	6
3	ラブルニク	FP	カバン	3
0	ミスコビク	FP	ルコシク	0
2	ホルバト	FP	ハベル	0
4	ボクラヤク	FP	クレピンドル	0
3	ミルヤク	FP	ラブコ	1
6	ラザレビク	FP	コネクニイ	0
3	ポポビク	FP	マイクス	1
21	（2）	7MT	（1）	16

観戦記

村田弘（オリンピック対策部長）

○……日本では考えられない夜の11時スローオフ。

ユーゴのスケールの大きいハンドボールと総合力優位に対しチェコがユーゴの動きの早いデフェンスを破れるか、また強烈なシュートを防ぎきるか、その力の差から7・3とユーゴの優位を予想した。

試合前の様子は余裕のあるユーゴは平然としているが奥深くひそめた意欲が伺えたのに対し、チェコはのまれている感じさえした。

○……前半チェコの固くなっているデフェンスと相手ミスからの速攻で4分で4—0とスタートから早くも優位に立ちおちつきはらった。5分チェコシュートのはねかえりを決めやっと4—1とするそのあと8分チェコは7mスローをもらい追い上げのチャンスかと思われたがユーゴGKアルスラナジクに好補された。その後20分までユーゴは速攻とラザレビック、ラブリニックの強引なシュートそしてボービックのポストの活躍で8—2と差を開くそれに反しチェコは速攻をやるがユーゴデフェフェンスの帰陣が早くシュートに結びつかない。その上ユーゴのファイト溢れる動きの早い守りを打ち破ることができずフォーメイションもただ繰返すだけでシュートがねらえない。あせる一方で攻めあぐんだ。

○……その後もラザレビックの根性ある火の玉のようなシュートが決まり前半にして早くも12—5と大差をつけ優勝に近ずいた。前半に見せたユーゴのGKの好守、固いデフェンスから出た速攻で6点、チェコのデフェンスのつめの甘さをついて打って5点を決めたラザレビックのシュートはチェコの生きのねを止めてしまった。

チェコはユーゴの速攻にダメージを受け興奮からデフェンスのコンビネーションが悪く全く打つ手なしといった感じであった。

○……後半に入りユーゴは7点差に気をゆるし動きにするどさをかくプレーがあったが攻撃展開が多彩でルーマニア戦に見たベンチのいそがしい動きもなく静まりかえりやりたい放だいに静まりかえっていた。18分に10点差をつけて優勝を決定ずけた。チェコも10分を過ぎるころよりやっとボール転回がよくなりスピードがでてきたこれもユーゴの気のゆるみからくるデフェンスの悪さも手伝ったともいえる。1分、6分、21分チェコが7mスローをもらいながらGKアルスラナジクにはばまれたまさに神技といった感がし前回の選手権3位決定戦で8本中7本をはばんだことを思い出した。

○……20分を過ぎるころよりユーゴも気を抜いたプレーが多くなり帰陣も悪くチェコの速攻が成功して12分間に8ゴールを上げやっと盛り上ったが万事休す21—16で終了、オリンピック初優勝世界の初制覇を成しとげた。ユーゴは自信に満ちていた。優勝の原動力は意欲に燃えた精神力とそこからくる持てる実力をいかんなく発揮したことである。特に上げられることは完璧のデフェンスしてそれから出る速攻、個人のシュート力とこれを生かせたフォーメイションプレー・ポストをマークすると上の3人がロングを打つロングをマークするとポストプレーが生きるといった爆発的攻撃力を持っていたその上GKの好守も忘れてはならない。

優勝・ユーゴスラビアの横顔

大会が近づくにつれ、ユーゴ最有力の声が高まり、総仕上げとみられた6月末の国際大会優勝でその評価は動かないものとなった。

結果は、その前評判を裏切らぬ堂々たる快勝で、緒戦で日本の拾て身に苦しんだのと〝事実上の決勝〟といわれたルーマニア戦（準決勝リーグ）を除いては、圧倒的な力の差を示した。

スノフ監督—ステンツエルコーチの名コンビがあみ出す多彩な変化攻撃と粘りつくような守備を、18才からすでに8年間ナショナルチームでプレーするというホルバトを中心にボクラヤク、ラブルニク、ラザレビクらが鮮やかにこなし、豹と異名をとるGKアルスラナジクの堅守などバランスのとれた攻守で栄冠を仕止めた。

過去の世界選手権では、2年前の3位が最高、6、7、8位各1回である。競技人口は男子二万四千、女子一万三千。トップに立つ男子のパルチザン・ブジェロバルは昨シーズンのヨーロッパカップ優勝クラブ。ミュンヘンへ絶好ののろしとなっていた。日本とは今回までで3戦1勝1敗1分。ハンドボールの人気は高く来年11月下旬世界女子選手権の開催をすでに決めている。

なお、この大会でユーゴの金メダルはハンドボールとボクシング（ライトヘビー級・パルコフ選手）の二つ。

NHKで決勝の放送計画

NHK・TVではオリンピック各球技の決勝を〝ミュンヘン・グランドファイナルシリーズ〟として10月第1週から毎週土曜日午後4時から再放送する計画をたてている。ハンドボール（ユーゴ対チェコ）は10月21日の予定。

ユーゴの来秋招待を検討

日本協会・田村会長と荒川理事長は9月26日の月例常務理事会で「ユーゴの日本招待について同国関係者とミュンヘンで話し合った」と発表、来秋招待へ具体的な交渉を進めることを明きらかにした。

◎順位決定戦

3位から8位までを決める順位決定戦は準決勝リーグ各組同位者によって行われ、いずれも大観衆が動員された。

ルーマニア3位

3・4位決定戦・ルーマニア対東ドイツの試合は9月10日午前11時30分からミュンヘンオリンピック公園・スポーツホールで行われた。審判＝カールソン、オルソン（スウェーデン）、観衆＝約一万一千。

ルーマニア 19（11－8、8－8）16 東ドイツ

得	ルーマニア		東ドイツ	得
0	ペヌ	GK	フリエスケ	0
0	デインカ	GK	ウエイスト	0
2	キシド	FP	ラント	2
2	リク	FP	ラングホフ	3
2	ガツ	FP	ガンショフ	2
5	グンネスク	FP	チンマーマン	2
0	ボイナ	FP	ラッケンマッヘル	1
0	ジョーベル	FP	ヒルデブラント	0
1	スイックル	FP	ローリッヒ	2
5	グルイアン	FP	ボーヘム	4
1	マリン	FP	ゾールナク	0
1	アドリアンコスマ	FP	ヤンクホファー	0
19	（3）	7MT	（4）	16

○……前回の世界選手権決勝と同カード。今回も決勝を予想された両国だ。銅メダルがかかっているとはいえさすがに気落ちしたカゲはかくせない。すべりだし巧くリードした東ドイツも10分3―3の同点にされるとあっさり主導権まで渡してしまいグルイアはよくマークしたもののグンネスク、ガッツの巧技にあって28分には11―7と4点あけられた。

後半なかばすぎから東ドイツは再び攻撃をたてなおし18分には13―14までせまったが、ルーマニアはこのあとグルイアが3点をたたきだし押し切った。

守りに廻るとベンチにさがるグルイアだが、さすがに攻撃の要所は〝現代一〟といわれるにふさわしい攻撃力を爆発させ、スタンドの興奮をよんだ。

ソビエト、西独破り5位

5・6位決定戦・ソビエト対西ドイツの試合は9月10日午後9時からミュンヘン・オリンピック公園スポーツホールで行われた。審判＝シマノビック、バルシク（ユーゴ）、観衆＝約一万二千

ソビエト 17（10－9、7－7）16 西ドイツ

○……ともに決め手を欠いて一進一退をつづけエキサイトした内容だった。

前半20分5たび同点7―7からソビエトは22分ラグテイン、25分パノフ（7MT）で2点のリードを奪った。しかし西ドイツもパノフの5分間退場のスキをついて追いこみ勝負を後半にかけた。

1点のリードをもつソビエトは後半4分ウサティが絶妙の倒れこみで11―9としたのが大きくこのプレーが試合を決めたといってもよい。すっかり余裕をもったソビエトは粘る西ドイツに1点差とせまられてもそれ以上はゆるさず逃げ切った。西ドイツは後半3分9―10のあとの7MTを落したのが痛く、残り5分間の反撃も焦って実らすことができなかった。

ソビエトは5分間退場2回、2分間4回、西ドイツは2分間2回をくった。

得	ソビエト		西ドイツ	得
0	セメノフ	GK	カーター	0
0	イシチェンコ	GK	ラスエン	0
4	パノフ	FP	アーレンドセン	1
2	クレフ	FP	ブラウン	1
2	イリイン	FP	ブシエル	1
0	シェブチェンコ	FP	フィンケルマン	0
0	クリモフ	FP	ランゲ	0
1	ルスツチェンコ	FP	ルブキング	2
1	レザノフ	FP	ムーラー	5
3	ラグディン	FP	ニュウハウス	0
0	ガツシ	FP	ロツジエ	1
4	ウサティ	FP	ウエネルト	5
19	（4）	7MT	（4）	16

接戦、スウェーデン勝つ

7・8位決定戦・スウェーデン対ハンガリーの試合は9月10日午前10時7分からミュンヘンオリンピック公園・スポーツホールで行われた。

スウェーデン 19（11－8、8－10）18 ハンガリー

（公式記録未着）

延長でノルウェー9位

9・10位決定戦・ノルウェー対ポーランドの試合は9月9日午後9時18分からミュンヘンオリンピック公園・スポーツホールで行われた。審判＝レイチェル、テテン（西ドイツ）、観衆＝約九千

ノルウェー 23（10－10、9－9、…、3－1、1－0）20 ポーランド

得	ノルウェー		ポーランド	得
0	オクセター	GK	ロスミアレク	0
0	ソーデルストリョーム	GK	コワルスジク	0
3	アンクル	FP	スゾルク	5
3	グラフ・ワン	FP	クタタ	2
0	ローズ	FP	レク	1
4	ティルダル	FP	ザワダ	3
2	ハバーベン	FP	ディボル	1
10	T・ハンセン	FP	メルセル	6
1	ウルダル	FP	ソコロウスキー	0
		FP	グミイレク	0
		FP	ワショウィック	0
		FP	アンツアク	2
23	（7）	7MT	（3）	20

○……一進一退をつづけ6たび日

の同点12—12になったのは後半10分。

このあたりからポーランドが押し気味となり後半26分には19—16と勝負あったかにみえた。しかしノルウェーは粘り18—19のあとノータイムで得た7MTをハンセンが決めてついに延長。延長後もポーランドが先手をとったがノルウェーはすぐタイ、そのあと一気に3ゴールして勝った。ノルウェーのファイト勝ちといえる。

▽11・12位決定戦＝3頁参照

日本 19（8—6、11—12）18 アイスランド

13～16位決定トーナメント

デンマーク13位に終る

13～16位決定トーナメントは予選リーグ各組4位によって行われ、優勝候補の一角にあげられていた強豪デンマークが、落たんの色を示しながらも順当勝ちした。

アメリカがスペインを降し、デンマークに善戦、14位となったのは注目されてよい。

▽予備戦

デンマーク 29（18—12、11—9）21 チュニジア

＜デンマーク＞ハンセン8、フロム、ハイデマン各5、ムンカゲル4、ソーレンセン3、K・アンデルセン2、ヨルゲンセン、ルント各1

＜チュニジア＞セバチ8、ハムローニ4、ジェリリ、カルラディ、クライ各2、ザイビ、ベン、ベルク各1

アメリカ 22（14—9、8—11）20 スペイン

＜アメリカ＞アブラハムソン7、バエルカート4、ベーカー、マッシュース各3、スパークス、ロジャース各2、ペルクホルツ—。

＜スペイン＞モレラ7、メディア4、タウレ3、ピラマリン、ラバカ各2、アンドリュー、カスカラーナ各1。

金メダル	ユーゴスラビア	（3）
銀メダル	チェコスロバキア	（7）
銅メダル	ルーマニア	（1）
4 位	東ドイツ	（2）
5 位	ソビエト	（9）
6 位	西ドイツ	（5）
7 位	スウエーデン	（6）
8 位	ハンガリー	（8）
9 位	ノルウエー	▲
10 位	ポーランド	▲
11 位	日　本	（10）
12 位	アイスランド	（11）
13 位	デンマーク	（4）
14 位	アメリカ	▲
15 位	スペイン	×
16 位	チュニジア	×

（ ）内は1970年の世界選手権順位
▲印はランキング外
×印は不出場

アメリカ、健闘の14位

13位決定戦・デンマーク対アメリカの試合は9月9日午後3時29分からミュンヘンオリンピック公園・スポーツホールで行われた。審判＝ケステリー、マルキ（ハンガリー）、観衆約九千

デンマーク 19（7—12、12—6）18 アメリカ

＜デンマーク＞ハンセン8、ハイデマン3、ルンド、ソーレンセン各2、K・アンデルセン、フリョーム、ヨルゲンセン、ボスガルト各1。

＜アメリカ＞アブラハムソン、ロジャース各5、マシュース4、ベーカー、バークホルツ各2。

○……アメリカの大健闘だった。デンマークは前半18分5—5からハンセンの連続5ゲットの活躍などで大量リードを奪った。

後半になるとアメリカは1点づつ慎重に返し12分には13—13のタイ、場内を沸かせた。

○……地力にまさるデンマークは13分アンデルセン、14分ソーレンセンでなんとか態勢を立てなおした。ところがアメリカは攻撃陣がすっかり自信をつけ26分17—17、27分ハンセンに奪われた1点も29分マシューズがとり返しエキサイトした好ゲームとなったがタイムアップ寸前デンマークはルントがジャンプシュートを決めアメリカを辛くも振り切った。

スペイン15位、チュニジア16位

15位決定戦、スペイン対チュニジアの試合は9月9日午後8時20分からミュンヘンオリンピック公園スポーツホールで行われた。審判＝フォーク、ロスマニス（西ドイツ）、観衆約六千。

スペイン 23（12—10、11—10）20 チュニジア

＜スペイン＞ロチェル9、モレラ5、タウレ4、ピラマリン2、ガルシア、メディナ、カスカラーナ各1

＜チュニジア＞セバチ9、ハムローニ、デジャマイエル各4、カルラディ、ジェリリ、ベル各1。

○……先行を許していたチュニジアは26分9—9と振り出しに戻したが、どうしても先手をとれず、スペインは後半なかば5点差をつけた。チュニジアは終盤再び反撃して2点差までつめたが及ばなかった。

東欧勢、圧倒的な強さ

○……全順位が確定して目立つのは東欧勢の強さだ。1位から5位までを独占し、2年前の世界選手権で上位に食いこんだデンマークスウエーデンの北欧勢はベスト6にももれ、伝統の西ドイツもランクを一つ下げた。ヨーロッパ以外の代表では日本よりもむしろアメリカが今回は注目をあびた。

◎準決勝リーグ

東ドイツ、ソビエトに敗る
チェコ、幸運な決勝進出

1組

チェコ 15（8—6、7—6）12 スウェーデン

得	【チェコ】		【スウェーデン】	得
0	クラリク	GK	カールソン	0
0	ボスピシル	GK	S・オルソン	0
3	サトラパ	FP	ビョ・アンデルソン	1
0	ヤリイ	FP	ボ・アンデルソン	1
3	カバン	FP	D・エリクソン	0
0	ハーバー	FP	L・エリクソン	5
2	クレピンダル	FP	ベン・ヨハンソン	0
1	ベネス	FP	ベニ・ヨハンソン	2
0	ラブコ	FP	コク	0
1	ブルナ	FP	O・オルソン	0
3	コネクニイ	FP	セゲルスタッド	1
2	マイクス	FP	ソーデルバーグ	2
15	(3)	7MT	(2)	12

○…試合終了と同時にこのあとの日程を中断の場内放送。テロ事件は最悪の状態になったかと思わせたが、つづいて「明日、犠牲者の追悼式」というアナウンス。五千のファンは拍手を送り混乱もなく外に出ていった。

場合によってはこれでオリンピックは中止になるのではないかという危惧さえあったのだが、6日

再開された。

ソビエト 11（7—4、4—4）8 東ドイツ

得	【ソビエト】		【東ドイツ】	得
0	イスチェンコ	GK	フリエスク	0
0	ウィルソン	GK	ウェイス	0
1	イリイン	FP	ラント	0
0	ガシ	FP	ラングホフ	0
1	レザノフ	FP	ガンショフ	0
3	パノフ	FP	ラケンマッハ	2
1	クレフ	FP	ウェルディグ	2
0	ルツセンコ	FP	ヒルデブラント	0
0	マキシモフ	FP	ローリグ	2
3	クリモフ	FP	ボエム	2
2	ウサティ	FP	ゾエルナク	0
0	シェブチェンコ	FP	ローズ	0
11	(2)	7MT	(1)	8

東ドイツ 14（6—5、8—6）11 スウェーデン

得	【東ドイツ】		【スウェーデン】	得
0	フリエスケ	GK	カールソン	0
0	ウェイス	GK	ストリョーム	0
2	ラント	FP	ビョ・アンデルソン	2
1	ラングホフ	FP	ボー・アンデルソン	0
6	ガンショフ	FP	D・エリクソン	0
2	チンマーマン	FP	L・エリクソン	4
0	ラッケンマッハ	FP	フイツシエルヌトリヨーム	0
1	ヒルデブラント	FP	ベン・ヨハンソン	1
0	ローリッグ	FP	ジョンソン	3
0	ゾエルナック	FP	ペルソン	1
0	ボエム	FP	セゲルスタッド	0
2	ヤンクホッハ	FP	ソーデルバーグ	0
14	(4)	7MT	(2)	11

チェコ 15（8—5、7—7）12 ソビエト

得	【チェコ】		【ソビエト】	得
0	クラリク	GK	セメノフ	0
0	ポスピシル	GK	イチェンコ	0
3	ラトラパ	FP	パノフ	2
1	ヤリイ	FP	マキシモフ	0
3	カバン	FP	クレフ	7
1	ルコシック	FP	イリイン	0
1	ハーベル	FP	シェブチェンコ	2
1	クレピンダル	FP	クリモフ	0
0	ベネス	FP	ルツセンコ	0
1	ラブコ	FP	レザノフ	0
4	コネクニィ	FP	ガシ	1
0	マイクス	FP	ウサティ	0
15	(2)	7MT	(3)	12

2組

西ドイツ1勝に終る

ユーゴ 24（10—8、14—7）15 西ドイツ

得	【ユーゴ】		【西ドイツ】	得
0	ジブコビク	GK	ボーデ	0
0	ゾルコ	GK	ラスエン	0
0	プリバニク	FP	アーレンドセン	0
1	ファイフリク	FP	ブシェル	4
0	カラリク	FP	フェルドホフ	0
6	ラブルニク	FP	フィンケルマン	0
1	ミスコビク	FP	カーレル	4
2	ホルバト	FP	ランゲ	2
4	ポクラヤク	FP	ルブキング	2
2	ミルヤク	FP	ニュウハウス	0
6	ラザレビク	FP	ロッジ	2
2	ポポビク	FP	ベステベ	1
24	(3)	7MT	(4)	15

西ドイツ 17（9—8、8—6）14 ハンガリー

得	【西ドイツ】		【ハンガリー】	得
0	ボーデ	GK	バルタロス	0
0	カーター	GK	スザボ	0
0	アーレンドセン	FP	カロ	1
2	ブラウン	FP	K・バス	3
3	ブシェール	FP	バルガ	2
0	カルレル	FP	マロシ	2
1	ランゲ	FP	S・バス	1
0	ルブキング	FP	シモ	2
6	ムーラー	FP	アドルヤン	0
0	ニュウハウス	FP	ハルカ	0
1	ロッジ	FP	タカグス	0
4	ウェナート	FP	スティーラー	3
17	(5)	7MT	(4)	14

ルーマニア 20（9—8、11—6）14 ハンガリー

得	【ルーマニア】		【ハンガリー】	得
0	ベヌ	GK	ホルバス	0
0	ディンカ	GK	バルトラス	0
2	キクシンド	FP	カロ	3
0	サムンギ	FP	K・バス	0
1	リク	FP	バルガ	3
0	ガツ	FP	マロシ	2
4	グンネスク	FP	S・バス	2
0	ボイナ	FP	シモ	2
0	ショーベル	FP	アドルヤン	0
8	グルイア	FP	ハルカ	1
2	ストックル	FP	タカクス	0
3	アドリアンコスマ	FP	スティーラー	1
20	(1)	7MT	(2)	14

事実上の決勝

9たび同点でユーゴ

ルーマニア、金メダルの夢消ゆ

ユーゴ 14（5−4, 9−9）13 ルーマニア

得	【ユーゴ】		【ルーマニア】	得
0	アルスラナジク	GK	ペヌ	0
0	ジブコビク	GK	デインカ	0
2	プリバニク	FP	キクシド	3
0	ホルバト	FP	サムンギ	0
4	ラブルニク	FP	リク	0
0	ミルヤク	FP	ガツ	0
0	ミスコビク	FP	グンネスク	1
0	ポクラヤク	FP	ボイナ	0
2	ポポビク	FP	ジョーベル	0
6	ラザレビク	FP	グルイア	8
0	カラリク	FP	ストックル	0
0	ファイフリク	FP	アドリアンコスマ	1
14	（3）	7MT	（3）	13

準決勝リーグ

（1組）	チ	東	ソ	ス	P	勝	負	分	得	失
①チェコ	…	(●)	○	○	4	2	1	0	42	38
②東ドイツ	(○)	…	●	○	4	2	1	0	36	34
③ソビエト	●	○	…	(△)	3	1	1	1	34	34
④スウェーデン	●	●	(△)	…	1	0	2	1	34	40

（2組）	ユ	ル	西	ハ	P	勝	負	分	得	失
①ユーゴ	…	○	○	(○)	6	3	0	0	56	44
②ルーマニア	●	…	(○)	○	4	2	1	0	46	39
③西ドイツ	●	(●)	…	○	2	1	2	0	43	51
④ハンガリー	(●)	●	●	…	0	0	3	0	44	55

Pは勝ち点，（ ）内は予選リーグの勝敗

観戦記

村田 弘（オリンピック対策部長）

○……オリンピック前の大方の予想ではユーゴ優勝説が一番強かった。約2ケ月前ユーゴのタシマイダン選手権では22−19のスコアーでユーゴがルーマニアを破り優勝していた。

試合前の両チームはあまり興奮状態もなく動中静ありといった感じであった。何んといっても過去の実績からしてルーマニアの至宝グルイアーの人気は試合前からものすごい。然しユーゴにもラザレビック、ラビリニック、プリバニク、ポポビックと人気スターが多勢いてチームの人気は上々であった。

○……戦前の予想は防御力に一番安定性を持ち変則デェフェンスから速攻につないでの得点力、またセットオフェンスでも主将プリバニク、左のラブリニック、野性的なジャンプシュート、ステップシュートの持主ラザレビックのシュート力とポストプレーの名手ポポビックの持つ攻撃力はスピードあり変化あり今大会で総合力のNo.1であった。これに対しルーマニアはシュートの神様グルイアーを持ち世界一のリードオフマン・ガツが如何にグルイアーその他をリードして得点に結びつけるか勝敗の分かれ目であった。

○……お互い知りつくした仲。開始から両チーム固くなっていた。攻撃にスピードを欠き得点を意識しすぎねらいすぎ力みすぎの単発シュートで決らなく重ぐるしい雰気であった。12分やっとグルイアーのシュートがポストにあたりそのはねかえりをユーゴ速攻でプリバニックが決めやっと均衡を破ったがすかさず次の攻撃でグルイアーが強烈なシュートを決め同点14分ラザレビックのジャンプシュートポストに突き刺さるように決まるもまたしても次の攻撃でマークしていなかったグネスにつめ悪く決められ2−2となる。

○……このあたりからようやく両チーム試合のリズムをつかみはじめる。17分ユーゴ、18分、23分とルーマニアは2本の7mスローを決めて初めてリードを奪ろう。こんどはラザレビックが27分ステップシュート、29分7mスローを決め5−4と1点リードで前半を終了した。デェフェンスシステムはユーゴは6・0から3・2・1へと変化したのに対しルーマニアは4・2を使っていた。両チームとも攻撃ラインが浅すぎて相手デェフェンスのふところに入り過ぎシュートが壁にあたるケースが多かったユーゴは徹底してガツ、グルイアーをマークした。

○……後半に入り3分ルーマニア7mスローを決め5−5、その後10分間両チーム得点の入れ合をつづけルーマニアが2回リードしたがそのあとユーゴが13分7mスロー15分ラザレビック、9分ラブリニックと3点を連取やっとこの試合始めて2点差がつく。残り時間と得点差からゲームがエキサイトしはじめた。2点リードで余裕のデェフェンスを見せはじめたユーゴに対しルーマニアは少しあせりが見えはじめた。そのあとも追いつ追われつ交互に得点の入れ合いが続き26分ユーゴが速攻で3点差をつけ勝利をものにした。然し、ルーマニアは死にもの狂で追い上げ3分間に2点を取りまたしても1点差につめよったが時間ぎれ14−13でユーゴの勝利に終る。

○……前半に反し後半は両チームとも積極的にゲームを展開しスケールの大きい試合であった。この試合得点を入れてリードすると次の攻撃ですぐ入れかえす実に意欲と闘志に満ち、また速攻の応襲はすばらしくこれに対する帰陣も早かった。グルイアーがマークされながらも8点をたたきこんだ威力には一万の観衆は驚嘆した。両GKの好補もすばらしく味方の危機を救ろうと同時にゲームをもり上げた。また前半対等で戦っている時ユーゴのポストプレーヤーポポビックが見せたバックハンドシュート（ポストにあたる）、グルイアーの強烈なシュートが頭にあたりそうぜんとなったがレフェリーの早い処置は立派であった。事実上の優勝戦といわれるにふさわしい最高級の試合だった。

ミュンヘンに拾う

★衝撃のテロ事件 夢にも想わなかったパレスチナゲリラによるテロ事件。現場にいちばん近かったハズの選手たちだがとびかう情報に真相が判らず、帰国するや出迎えの人たちに詳細を聞くありさまだった。

イスラエルとは昨秋アジア予選で顔を合せたあとだけに哀悼の意も一しお。ある選手は「当然、追悼式に出るものだと思った」といっていた。

★会場に爆弾？ ゲリラ事件で中断していた競技はハンドボールのルーマニア×ハンガリー戦で再開されたが、その直前会場に「爆弾を仕掛けた」という電話がかかり、組織委員会やポリスが場内をくまなく捜索、結局それらしいものは発見されなかった。しかし、この騒ぎに席をたって帰る観客が多く、世界チャンピオン・ルーマニアのミュンヘン初登場も淋しいスタンド風景だった。

◎予選リーグ（A～C組）

A　組

3試合が引き分け　デンマーク脱落の波乱

デンマーク 12（7－6、5－6）12 ソビエト
引き分け

＜デンマーク＞ボスガード4、A・アンデルセン、ハンセン各3、T・ルンド

＜ソビエト＞ガシ6、パノフ3、イリン、シェブチェンコ、クリモフ各1

スウェーデン 13（5－7、8－6）13 ポーランド
引き分け

＜スウェーデン＞L・エリクソン7、アンデルソン、コク各2、セゲルスタット、ソーデルバーグ各1。

＜ポーランド＞デイボル6、グムイレク3、アンツアク2、ククタ、ソコロウスキー各1。

ポーランド 11（6－4、5－4）8 デンマーク

スウェーデン 11（4－3、7－8）11 ソビエト
引き分け

（この記録は準決勝リーグに適用）

スウェーデン 16（8－4、8－6）10 デンマーク

＜スウェーデン＞ビヨ・アンデルソン、L・エリクソン各4、D・エリクソン2、ボ・アンデルソン、ヨハンソン、オルソン、セゲルスタッド、ソデルベルグ各1。

【スウェーデン】		【ソビエト】
ストリヨーム	KG	イスチエンコ
カールソン	KG	ウィルソン
ボー・アンデルソン	FP	イリイン
ビヨ・アンデルソン	FP	レザノフ
L・エリクソン	FP	クレフ
D・エリクソン	FP	クリモフ
ヨハンソン	FP	ウサテイ
セゲルスタッド	FP	ガシ
ソーデルバーグ	FP	ルッセンコ
O・オルソン	FP	オガネゾフ
コック	FP	マサシモフ
ベン・ヨハンソン	FP	パノフ
（3）	7MT	（4）

＜デンマーク＞ハンセン、K・アンデルセン各4、フランドセン、ジェンセン各1。

ソビエト 17（9－4、8－7）11 ポーランド

＜ソビエト＞イリン5、クレフ3、パノフ、セブチェンコ、クリモフ、ガシ各2、レザノフ1

＜ポーランド＞メルセル4、スゾルク、グマイレク各2。ククタ、レク、ディボル各1。

【後記】どこが勝つのか判らないと専門記者たちを悩ませたとおり、まったくの実力伯仲、6試合のうち半数が引き分けという大激戦だった。

結果的には勝てないまでも負けなかったスウェーデン（昨秋来日）とソビエトが準決勝リーグへ進んだが両者はやはりそれだけの地力があったといえるだろう。

ソビエトは前回の世界選手権で得点王となったエース・マキシモフが足の負傷から出場できず、苦戦を強いられたが、ムラのない攻撃力と粘りのあるディフエンスでその穴をカバーした。

スウェーデンは、L・エリクソンの活躍が光った。ポーランド戦は1回もリードできず、残り3分の7MTでどうにか13－13としたのだが、これはポーランドの健闘を賞すべきだろう。

ポーランドはよくやった。第2戦でデンマークを圧倒したあたり鮮やかで、逆に金メダル候補の一角にあげられていたデンマークはこれでガックリいき、1勝もあげ得ず、Dクラスを決めるトーナメントにまわらざるを得なかった。

なお、スウェーデン、ソビエトは勝ち点はもとより得失点差そのほかすべて同率、抽せんでスウェーデンが1位扱いにされた。

B　組

東ドイツ危気なし

東ドイツ 16（7－6、9－5）11 アイスランド

＜東ドイツ＞ランド5、ガンショフ、ローズ各3、ローリッグ、ボエム各2、ラケンマッハー

＜アイスランド＞ジョンソン、グンナルソン、ハルスタインソン、マグヌッソン各2、ボエルギビンソン、シグスタインソン、エイナルソン各1。

チェコ 25（10－3、15－4）7 チュニジア

＜チェコ＞ベネス8、ハベル4、ブルナ、コネクニイ、マイクス、サトラパ各2、ヤリイ、クレピンドル各1。

＜チュニジア＞カラディ2、クゾーリ、クライ、セバチ、ジェリリ、ハムローニ各1。

東ドイツ 21（11－2、10－7）9 チュニジア

チェコ 19（8－10、11－9）19 アイスランド
引き分け

得	【東ドイツ】		【チェコ】	得
0	フリエスケ	GK	クラリク	0
0	ボアト	GK	スカルパン	0
2	ラント	FP	サトラパ	0
1	ラングホフ	FP	ヤリイ	1
4	ガンショフ	FP	バカン	0
2	ラッケンマッハ	FP	ルコシク	0
0	ヒルデブラント	FP	クレビンダル	3
1	ローリッグ	FP	ベネス	0
3	ボエム	FP	ラブコ	1
0	ゾエルナク	FP	コネクニイ	7
1	ヤンクホフア	FP	マイクス	0
0	ローズ	FP	スカラ	0
14	（0）	7MT	（4）	12

東ドイツ 14（5－4、9－8）12 チェコ

（この記録は準決勝リーグに適用）

アイスランド 27（14－7、13－9）16 チュニジア

＜アイスランド＞マグヌソン7、ハルスタインソン6、アセルソン4、スクラソン、ボエルギブソン各3、シモナルソン2、シグスタインソン、ヨンソン各1。

＜チュニジア＞クライ、セバチ各3、クゾーリ、ベン、カラルディイ各2、ジェリリ、シャイエ、ハムローニ、デマイエル各1。

【後記】予想どおり東ドイツが全勝した。攻撃面では相変らず力と技をうまくとけこませたローリングオフェンスであったが、守りが実に巧く固かった。

このためヤマとみられたチェコ戦も後半3分いちど6－7とリードされただけで、ほとんど優位に試合を進めた。チェコは立ちあがりいきなり0－3とされたのが最後までひびいた。

チェコはマレスなどが引退し、ガラリとメンバーを代えて登場したため大舞台になれぬような印象を与え、まさか決勝戦へ進むとは思わなかった。

アイスランドはチェコと引き分ける善戦をみせたが、調子に波がありすぎ、チュニジアではセバチィ（185cm）のシャープな攻撃力が目についた。

C組

西ドイツ、辛くも進出
ノルウエー惜しまれる3位

ルーマニア 18（11－10 7－4）14 ノルウェー

＜ルーマニア＞グネスク、グルイア各6、キシド、コスマ各2、リク、ストックル各1。

＜ノルウエー＞ハンセン4、オスサー、ティルダル各3、ライナートセン2、アンクル、I・ハンセン各1。

西ドイツ 13（7－5 6－5）10 スペイン

＜西ドイツ＞ランゲ、ルブキング各3、ブシェル、ウエネルト各2、アーレンドセン、ブラウン、ムーラー各1。

＜スペイン＞アンドレス4、モレラ3、ビラマリン、タウレ、オルテガ各1。

ルーマニア 15（6－4 9－8）12 スペイン

西ドイツ 15（7－8 8－7）15 ノルウェー
引き分け

ルーマニア 13（5－5 8－6）11 西ドイツ

（この記録は準決勝リーグに適用）

ノルウエー 19（10－4 9－13）17 スペイン

＜ノルウエー＞ライナートセン5、I・ハンセン4、T・ハンセン4、オスサー、ティルダル、ベルベン各2、グラフ・ワン1。

＜スペイン＞タウレ6、モレラ4、ラバカ3、ビラマリン、ロペス、メディナ、カスカラーナ各1。

【後記】地元西ドイツが出場するとあって各日とも大観衆が詰めかけた。焦点は最後のルーマニア×西ドイツ戦だったが、西ドイツはその前のノルウエーにてこずり引き分け、ノルウエー×スペイン戦のスコアいかんではベストエイトから脱落というきわどさだった。

ルーマニア戦における西ドイツのすべり出しは必ずしも悪くなかった。先制点は1分グルイアにとられたが、すぐムーラーが返し、その後は一進一退。26分ブシェルのゲットで5－4と初めリードを奪った。しかしルーマニアはハーフタイム直前ガッツが強引に持ちこみ同点。

後半、ルーマニアはエース・グルイアに徹底的に射たせ5、7分連続ゴールに成功、8分コスマが1点を加えて8－5とし、再び優位に立ち、そのままのペースで押し切った。

この結果、ノルウエー×スペイン戦でノルウエーが6点差で勝つと西ドイツのベストエイト入りは不可能になるピンチとなった。

ノルウエーは当然スパート。10分4－0、22分6－3、前半10－4と順調に加点したのだが、後半に入るとモレラを主力としたスペインの反撃を食い後半20分あたりからみるみる点差がちぢまり26分には18－17とせまられる拙戦。

ノルウエーは大望を逸し西ドイツは辛くも勝ちあがることができた。

得	【西ドイツ】		【ルーマニア】	得
0	カーター	GK	ペヌ	0
0	ラスエン	GK	デインカ	0
0	ブラウン	FP	キシド	1
3	ブシェル	FP	リク	1
0	フィンケルマン	FP	ガッツ	2
1	ムーラー	FP	クンネスク	1
2	ニューハウス	FP	ボイナ	0
1	ウエナート	FP	ショーベル	0
3	ベスデベ	FP	グルイア	7
1	ロッジ	FP	ツドセ	0
0	ルブキング	FP	ストックル	0
0	ランジェ	FP	アドリアンコスマ	1
11	（1）	7MT	（1）	13

予選リーグ

（D組）	ユ	ハ	日	ア	P	勝	負	分	得	失
① ユーゴ	…	○	○	○	6	3	0	0	63	45
② ハンガリー	●	…	○	○	4	2	1	0	64	45
③ 日本	●	●	…	○	2	1	2	0	46	56
④ アメリカ	●	●	●	…	0	0	3	0	46	73

（A組）	ス	ソ	ポ	デ	P	勝	負	分	得	失
① スウエーデン	…	△	△	○	4	1	0	2	40	34
① ソビエト	△	…	○	△	4	1	0	2	40	34
③ ポーランド	△	●	…	○	3	1	1	1	35	38
④ デンマーク	●	△	●	…	1	0	2	1	30	39

（B組）	東	チェ	ア	チュ	P	勝	負	分	得	失
① 東ドイツ	…	○	○	○	6	3	0	0	51	32
② チェコ	●	…	△	○	3	1	1	1	56	40
③ アイスランド	●	△	…	○	3	1	1	1	57	51
④ チュニジア	●	●	●	…	0	0	3	0	32	73

（C組）	ル	西	ノ	ス	P	勝	負	分	得	失
① ルーマニア	…	○	○	○	6	3	0	0	46	37
② 西ドイツ	●	…	△	○	3	1	1	1	39	38
③ ノルウエー	●	△	…	○	3	1	1	1	48	50
④ スペイン	●	●	●	…	0	0	3	0	39	47

Pは勝ち点（ポイント）
A組はすべてが同率で2国が1位

D組

ユーゴ 20－14 日本
ハンガリー 28－15 アメリカ
ユーゴ 25－15 アメリカ
ハンガリー 20－12 日本
ユーゴ 18－16 ハンガリー
日本 20－16 アメリカ

（D組詳報は4～6頁）

★落ちつかぬ周囲 大会前のローデシア問題でユーゴスラビアのボイコットが噂され、テロ事件のためノルウエーが順位決定戦の参加をとりやめる気配が伝えられたり、アウグスブルグの試合（日本対アメリカなど）では会場周囲で反オリンピック運動のデモが行われるなど36年ぶりのハンドボール周辺も落ちつかなかった。

数字でのぞくミュンヘンオリンピック（本誌調べ）

順位	国名	試合数	勝	分	負	総得点	総失点	シュート回数	被シュート回数	得た7MT ( )内得点	与えた7MT ( )内失点	得たFT ( )内得点	与えたFT ( )内失点
⑪	日本	5	2	0	3	82	93	231	214	8(4)	21(12)	149(0)	127(1)
①	ユーゴ	6	6	0	0	123	91	221	226	21(18)	29(19)	140(0)	210(1)
②	チェコ	6	3	1	2	102	85	205	215	27(19)	17(11)	227(0)	215(0)
③	ルーマニア	6	5	0	1	98	81	210	237	12(9)	24(17)	195(0)	160(0)
④	東ドイツ	6	4	0	2	89	73	192	202	16(14)	12(11)	153(0)	295(1)
⑤	ソビエト	6	3	2	1	80	73	157	167	17(13)	16(13)	215(0)	290(0)
⑥	西ドイツ	6	2	1	3	87	93	208	191	27(20)	22(17)	207(0)	221(0)
⑦	スウエーデン	6	2	2	2	82	81	188	169	16(13)	22(18)	326(1)	167(1)
⑧	ハンガリー	6	2	0	4	110	102	251	220	34(24)	18(14)	184(2)	141(0)
⑨	ノルウエー	5	3	1	1	90	87	195	185	33(25)	15(11)	182(0)	148(0)
⑩	ポーランド	5	2	1	2	75	75	171	190	18(11)	18(16)	155(0)	238(0)
⑫	アイスランド	5	1	1	3	89	90	206	203	15(13)	15(10)	173(1)	168(0)
⑬	デンマーク	5	2	1	2	78	78	201	164	16(10)	15(12)	227(0)	160(0)
⑭	アメリカ	5	1	0	4	86	112	204	223	19(13)	17(14)	139(0)	175(0)
⑮	スペイン	5	1	0	4	82	90	182	209	22(20)	23(16)	148(0)	181(0)
⑯	チュニジア	5	0	0	5	74	125	225	232	11(8)	28(23)	223(0)	147(0)

（注）・シュート回数には得た7MT数も含まれている。・被シュート回数には与えた7MT数も含まれている。

日本チーム・試合別内訳（ ）内は得点又は失点

勝敗	相手国	シュート数	被シュート数	得た7MT	与えた7MT	得たFT	与えたFT
●	ユーゴ	40(14)	40(20)	3(3)	3(2)	28(0)	23(0)
●	ハンガリー	46(12)	45(20)	1(0)	4(2)	24(0)	27(0)
○	アメリカ	48(20)	39(16)	2(0)	5(2)	37(0)	21(0)
●	ノルウエー	48(17)	41(19)	2(1)	7(4)	40(0)	30(0)
○	アイスランド	49(19)	49(18)	0(0)	2(2)	20(0)	26(1)
計		231(82)	214(93)	8	21	149	127

個人得点ベストテン

①グルイア（ルーマニア）37
②I・バルガ（ハンガリー）32
③ラブルニク（ユーゴ）28
④ラザレビク（ユーゴ）27
④ハンセン（デンマーク）27
⑥L.エリクソン（スウエーデン）25
⑦アブラハムソン（アイスランド）24
⑦セバチイ（チュニジア）24
⑨コネクニイ（チェコ）22
⑨ハンセン（ノルウエー）22

野田　清（日本）15
近森　克彦（日本）14
飯田　誠行（日本）14

相手シュート阻止率

①ルーマニア	0.658
②東ドイツ	0.644
③ユーゴ	0.611
④チェコ	0.605
⑤ポーランド	0.589
⑥スペイン	0.574
⑦日本	0.565
⑧ソビエト	0.563
⑨アイスランド	0.557
⑩ハンガリー	0.541
⑪スウエーデン	0.527
⑫ノルウエー	0.530
⑬デンマーク	0.524
⑭西ドイツ	0.513
⑮アメリカ	0.498
⑯チュニジア	0.461

シュート成功率

①ユーゴ	0.552
②ソビエト	0.510
③チェコ	0.497
④ルーマニア	0.467
⑤東ドイツ	0.464
⑥ノルウエー	0.462
⑦スペイン	0.451
⑧アイスランド	0.442
⑨ポーランド	0.439
⑩スウエーデン	0.431
⑪ハンガリー	0.430
⑫アメリカ	0.442
⑬西ドイツ	0.418
⑭デンマーク	0.388
⑮日本	0.355
⑯チュニジア	0.324

□…打ち出された数字と項目はきわめて単純なものだが、これだけのデータからも今大会の一面をのぞくことができる

優勝したユーゴはさすがに各項目で安定している。1試合の平均得点20点強、同失点14点強。日本の14－20の敗戦もいたしかたないところか。

得失点差を並べても①ユーゴ32②チェコ・ルーマニア17④東ドイツ16⑤ハンガリー8⑥ソビエト7⑦ノルウエー3⑧スウエーデン1と上位国がプラスを示し、日本のマイナス11はいぜんオフェンスに課題があるとみたい。

□…シュート成功率はユーゴが55%と抜群、日本の35%はあまりにも低い。確率の高いシュートを目標にしながらこの結果は反省が必要だ。日本のシュートはきわどいスポットを狙いすぎバーやポストに当たるケースが多いというのだが…

シュート阻止率は必ずしも算出することに意義があるとも思えぬが、高いアベレージをマークしているのはやはり上位国だ。

7MTで目立つのは日本がとられすぎる割にとれていないことだろう。体格差が一因とみられる。

FT（フリー・スロー）からの得点は全試合を通じて4回だけ。

□…個人得点はルーマニアの大砲グルイア（192cm、90K、31才）が予想どおりトップ。彼は攻撃専門でいっさいディフェンスには廻らない。

135cm以上のアタッカーが並ぶなかでコネクニイは173cmの小柄。機をみるに敏な動きと7MTで22点をあげた。カムバックしたルブキング（西ドイツ）は完全に峠をこした。なお今大会190cm以上の選手は48人。最高はグンネスク（ルーマニア）とクライ（チュニジア）の197cm。

ダイナミックな攻撃を〝報告〟

帰国報告試合

オリンピックチームの帰国報告試合は9月23日午後2時7分から大阪市中央体育館で、毎日放送のテレビマッチとして大阪選抜との間に行われ、立ちあがり代表チームは大阪の粘りにリードを奪われたが、前半なかばからダイナミックな攻撃と本田の堅守で圧倒、快勝した。試合に先立ち大島靖大阪市長が〝始球式〟を行ったが、ハンドボール界では珍しいセレモニーだった。

オリンピック代表 30（17―8、13―6）14 大阪選抜

【代表】	得	【大阪選抜】	得
GK 本田	0	GK 今井（湧永薬品）	0
GK 下里	0	GK 広川（イーグルス）	0
FP 木野	5	FP 福井（イーグルス）	1
FP 近森	3	FP 樫塚（イーグルス）	2
FP 野田	5	FP 高橋弟（イーグルス）	2
FP 有永	6	FP 高橋兄（湧永薬品）	2
FP 飯田	4	FP 戸田（湧永薬品）	2
FP 中井	4	FP 中村（大阪体大）	2
FP 新実	1	FP 丸井（堺工高）	1
FP 佐々木	2	FP 土田（大山商会）	1
FP 水海	0	FP 前島（大山商会）	1
FP 早川	0	FP 森（湧永薬品）	0
30	（1）7MT	（0）	14

（審・望月、前田）

好調に進めた前哨戦

トライアルゲーム

8月18日ミュンヘン入りした日本チームは大会開幕までに地元の有力クラブと3試合のテストマッチ、アイスランドと1試合のトライアルゲームを行った。

当初はD組以外のナショナルチームとの対戦を数試合予定していたが、ほとんどの国が25日（開会式前日）に到着したためならなかった。

▽第1戦（8月23日・ミュンヘン）＝20分ハーフ

日本 18（9―5、9―5）10 ミルバス・フォーフェン

【日本】	得
GK 下里	0
GK 本田	0
FP 飯田	4
FP 有永	2
FP 早川	1
FP 新実	2
FP 中井	3
FP 木野	4
FP 野田	1
FP 水海	0
FP 近森	1
FP 佐々木	0
計	18

（注）ミルバス・フォーフェンは西ドイツ全国リーグ（1部）南部地区6位。

▽第2戦（8月25日・ミュンヘン）＝20分ハーフ

日本 23（14―3、9―4）7 アラッハ

【日本】	得
GK 本田	0
GK 下里	0
FP 新実	3
FP 早川	3
FP 中井	5
FP 水海	0
FP 野田	2
FP 木野	3
FP 有永	2
FP 近森	2
FP 飯田	3
FP 佐々木	休
計	23

（注）アラッハはミュンヘン地区リーグ2位。11人制では全国リーグ（1部）南部地区7位。

アイスランドに勝つ

第3戦は8月26日ミュンヘンで世界選手権11位のアイスランドと対戦した。（公式国際試合扱い）

日本 21（10―9、11―10）19 アイスランド

【日本】	得	【アイスランド】	得
GK 下里	0	GK フィンボガソン	0
GK 本田	0	GK フィナーソン	0
FP 近森	2	FP スカランソン	1
FP 飯田	0	FP O・ジョンソン	7
FP 有永	4	FP S・ジョンソン	1
FP 木野	3	FP ブョエルギブソン	2
FP 早川	4	FP ガンナーソン	2
FP 中井	3	FP マグヌソン	1
FP 新実	3	FP シモナルソン	1
FP 水海	0	FP シグスティンソン	1
FP 野田	2	FP ホールスティンソン	2
FP 佐々木	0	FP オーグマンゾソン	1
21			19

○……アイスランドとは2年前の世界選手権で対戦（20―19で勝ち）その時のメンバーが9人残っている。さすがにナショナルチームとなると当りがはげしく1分中井の強引なシュートを口火に18分8―4とリードしたものの追いあげられ、ディフェンスの詰めの甘さもあって29分11―10とせまられた。

○……後半、アイスランドはフォーメーションプレーを使い分け、前半の力まかせのプレーと様相を変えた。日本も〝本番用〟のフォーメーションを小出しにしまずまずのデキだったが、ディフェンス面の連けいがもうひとつまとまらず試合の主導権を握ることができなかった。

後半25分以後、相手のへばりに乗じた速攻で決勝点をあげ振り切った。この時はまさか大会の最終戦で再び顔を合わせるなどとは思ってもみなかった。（村田）

▽第4戦＝前哨戦最終試合（8月27日・ミュンヘン）

日本 29（18―9、11―12）21 TSV・オスト

【日本】	得
GK 本田	0
GK 下里	0
FP 飯田	8
FP 木野	3
FP 有永	2
FP 野田	3
FP 中井	7
FP 新実	5
FP 水海	0
FP 竹野	1
FP 近森	休
FP 早川	休
FP 佐々木	休
計	29

（注）オストはミュンヘン地区リーグ3位。第4回世界選手権（一九六一）で優勝したルーマニアの主力・モーゼルがプレーイングコーチとして所属しており、要所で登場38才とも思えぬ巧技を見せた。日本側も3選手がコンディションをくずしていたため竹野（36才）が2年ぶりでプレーした。

全日本選手の公式記録

ミュンヘン終了現在のオリンピック出場12選手・公式国際試合出場記録（通算）は次のとおり。

木野39試合（181点）、近森39（102）、飯田37（71）、野田32（72）、早川24（13）、有永20（47）、中井18（24）、水海12（9）、新実11（4）、佐々木6（1）＝以上FP、本田29、下里27＝以上GK。

名実ともに世界的機構へ

IHF総会

第14回国際ハンドボール連盟(IHF)総会は8月22日から24日まで西ドイツ・ニュウルンベルグで開かれ日本からはIHF担当の渡辺和美副会長、河内鋭雄海外駐在代表の両氏が出席した。

本誌既報のとおり、今回は世界のハンドボール界の飛躍を裏付けIHFの視野を大きく拡げた機構改革が中心議題となり、ヨーロッパのスポーツから世界のスポーツへ積極的な姿勢が打ち出されるという画期的な総会となった。

日本などがかねてから要望していた「地域連盟」の結成も承認されヨーロッパ、アジア、アフリカアメリカ各大陸別に連盟が組織されることになり、また、IHF理事会も13名から15名に増員。アジア、アメリカ、アフリカの3大陸から各1名の代表理事が加わることになり渡辺氏が別掲の通りアジア代表理事に決まった。

この提案は、渡辺副会長が3年前から働きかけていたもので、今回ようやくIHFの姿勢と合致、実現をみた。

台湾も正式加盟国に

注目の新加盟国問題は仮加盟となってすでに2年が経ったエチオピア、リビア、トーゴ、ギニアの4ケ国は異議なく正式加盟への昇格が決まったが台湾については、世界の潮流が中国に傾斜しており、東ドイツから採決によって決定すべきだとの動議が出され、秘密投票の結果、加盟賛成25、反対10、棄権6で承認された。(この項、8月25日付時事通信)

新会長にホグベルグ氏

このほか、規約にのっとって役員が改選され、46年2月、ハンスバウマン会長(スイス)の死去で空席となっていた会長に首席副会長ボール・ホグベルグ氏(スウェーデン、61才)を推載、第3代IHF会長の誕生をみた。

また、事務総長(理事長)にマックス・リンケンバーガー氏(西ドイツ=昨秋来日)が新任されたのが注目される。

日本協会では渡辺副会長の帰国(9月末)を待って総会の正式報告を聞き、IHF体制にそった日本協会の機構改革を行うかどうかを決めるほか、地域連盟結成への態度を固める予定だ。

時間かかるかアジア連盟

〈解説〉ミュンヘンオリンピックを機にIHFがこれまでのヨーロッパ偏重から脱皮したという点で特筆すべき総会となった。内部機構の改正はもとより名実ともに世界的な組織へ歩みを進めたわけだ。競技面における日本、アメリカ、カナダ、チュニジアなどの活躍もIHF首脳陣に自信を植えつけたといえるだろう。

渡辺副会長らが要望していた大陸別代表の理事会参加や地域連盟問題もこの時流にうまくのり一気に実現をみた。

今後の日本協会にとって問題なのは地域連盟結成をどのように進めていくかだ。

現在アジア地域でIHFに加盟している国は日本、韓国、台湾の東アジアと、イスラエル、レバノン、クウェートの西アジアの両極端、実質的にアジアのリーダーとなった渡辺副会長がこの間の調整をどう運ぶかも一つのカギだが、感覚の違いなどから「東西」の話合いにはかなりてまどるのではなかろうか。

韓国の朴応喆理事長(IHF総会出席)は非公式な見解として「まず日本、韓国、台湾で話合いをし、そのあとイスラエルなどと調整をしたらどうか。いずれにせよ6ケ国揃ったのだから早い時点で連盟を結成し、アジア競技連盟(AGF)へ加盟すべきだ」という

しかしIHFによる規約提示までには時間がかかりそうで役員(スタッフ)の決定、アジア選手権やアジアカップ(各国チャンピオン)による選手権)などの事業に着手するとなると早くても2年はかかろう。

ある消息通は「一九七五年(昭50)に予定されるモントリオールオリンピックのアジア予選が第1回アジア選手権を兼ねることになるのではないか」とみている。

いずれにせよ「アジアの結束」について日本協会が主導権を握って進むのかどうか、国内の姿勢が先決で、10月15日の全国会議の成り行きが注目される。(X)

渡辺副会長、IHF理事に

IHF総会第3日の8月24日、役員の改選が行われ、規約改正によって新たに加わることになった大陸代表理事のうちアジア地域については日本の渡辺和美氏とレバノン代表の決選投票となり渡辺氏がアジア代表理事に決まった。

日本協会役員がIHFの理事に就任するのは初めてのこと。

渡辺和美－IHF理事略歴　日本協会副会長、東京協会会長、大崎電気工業社長、48才、早大出。

第1回　全国中学生大会後記

西川勤也
（愛知協会常務理事）



◇会場と宿泊

会場には広大な緑地帯（約200ha）に愛知県が青少年の心身鍛錬と健全な精神を育成する目的で造られた公園があてられ、管理棟を中心に講堂、図書館など文化施設、体育館、武道場、プール、陸上競技場、野球場(2面)、サッカー場、テニス場、バレーコート面(10)、キャンプ場、サイクリングコース(5・2K)、児童遊園地、宿泊棟(500名収容)などの施設があり、この地に中学生300名が集って中学生大会を開催したことはよい思い出になったと思われる。

大会はサッカー場に4面のコートと体育館を使用して運営。同時に体力測定も行なった。

選手たちは初の芝コートでの試合で最初とまどってプレーしていたが、ゲーム毎になれ大会気分も最高潮に達した。芝コートの利用で負傷者はほとんどなく主管者を安心させた。

宿泊は管理者の示す生活時間内で行動をとらなければならず大会日程がそれに左右されたことや各チームが希望する人数を宿泊させ得なかったこと、試合中に湯茶の接待が公園内のためできなかったことなどのキュウクツさもあった。

なお、帰途、一部のチームが清掃せず退所したことは残念で付添者の反省を求めたい。

◇日程

ダブルヘッダーのインターバルが60分しかなく、第1試合不戦のチームが有利であったことに反省が残る。体力測定（18日午後、男女を前後半に分けて実施）の時間帯を考えれば試合時間は解決できることであった。

◇試合

各校とも地域代表としての自覚を持って臨み初大会ながら好内容であった。男子は全般的に好チームが揃い特に準決勝に出場した4校は技術的にも秀れポスト、ブロックのほかしばしばスカイプレーをも組み立て高校生なみだった。

優勝の東港中(愛知)は平均身長175cmという体躯と秀れたパスワークとコンビネーションは抜群、日本協会の「ジュニアナショナル」に推したい選手もいた。

女子は全体に小じんまりとまとまったチームプレーに徹し、決勝を争った両校は速攻と組織立ったプレーに秀でていた。個人的に注目を集めたのは玉南中(熊本)の畑田世利子選手(164cm)で高い位置からのシュート力は参加選手ずい一という評判しきりだった。

◇今後の問題点（付添者との話しあいから）

・申しこみ期日を開催20日前にしないと主管側の準備に支障がある

・体力測定、技術指導は今後も行って欲しい。ただし実施の時間帯は再考を要する。

・1チームの人数を12名から15名に増員して欲しい。

・参加チーム数……各地域男女各2校、普及度の高い地域は2校、ここ2〜3年は今回どおりなどの意見が出た。

・交通費の全額または一部の日本協会負担を要望。

・練習場の確保

・宿泊人数を参加者側の希望にそうようにして欲しい。その場合、規定人数外は参加者負担とする（なお、本年もこの点について公園側と話しあったがならなかったいきさつがある。）

◇審判問題

警告・退場について厳しすぎるとの意見と、中学生は厳しくしなければ今後の発展にならないという意見に分かれた。また審判員のコンビネーションや各地域からも審判員を集めるようにとの要望もあった。

最後に参加者全員が全国中学生大会は日本ハンドボール界にとって意義のあるものであることを確信、日本協会・全国中体連のより深い理解を得ていつまでも大会を実施しつづけて欲しいと結論をだしたことを付け加えておく。【カット写真は男子決勝・東港(愛知)対加納(岐阜)戦から】

続・全国中学生大会指導者アンケート（締切後到着分）

◇質問項目①今大会もっともよかった点、②来年以降へのアドバイス。なお、③中学校指導者として日本協会に望むことへの回答は、誌面のつごうで省略させていただきます。

水海道中（茨城）片見　治夫

①環境―自然の中の人工美がよくまとまっていた。宿泊設備が整っていた。

②試合場をサッカー場以外に設置できないものか。練習会場がなかったのは残念。宿泊は希望（自費）があれば泊数を自由に。

玉南中（熊本）田上　征人

①場所・環境が申し分なかった。

②開会式をアウトドアで行いたい。敗者復活戦制など布いて試合数をもう少し増やして欲しい。

好間中（福島）青田　正

①全国の中学ハンドボールの現状を知り得たこと。技術指導(北川勇喜氏)で今後のトレーニングの指針を得たこと。

②練習コートを設けて欲しい。役員章などをつくり、大会役員、各校監督などの目印をつけたらどうか。

（回答の掲載は今号で打切ります）

太陽国体展望

～10月23～27日・鹿児島県隼人町～

太陽国体——第27回国民体育大会ハンドボール競技は10月23日から27日までの5日間、鹿児島県隼人町で行われる。

各種別とも最近は地域差がまったく感じられなくなり、年間各大会を通じてもっとも波乱にとんだ内容が展開されている。

ミュンヘン後、新しいスタート台に立った斯界の〃若い力〃を見つけだすうえにも興味深い大会だ。オリンピッオ選手12人のうち8人（いずれも一般男子）が登場するのも話題。

なお北海道代表は「選手団縮小」のあおりで、一般男女を棄権した。

組み合せをみながら有力チームを拾い出してみよう。

（杉山　茂）

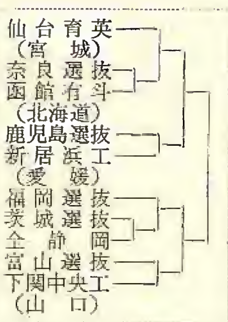
地元が候補一番手

◆高校男子（10チーム）予選で有力チーム（地域）が敗れ、高校部門は男女ともシード制をとりはずしてのフリー・ドローイング。そのためか1・2回戦いずれもイキをぬけぬ好カードが並んだ。

一応、混戦を抜け出すとみられるのは仙台育英（宮城）、鹿児島選抜、福岡選抜、下関中央工（山口）で地元・隼人工を主力とした鹿児島と小倉西中心の福岡がなかでも有力だろう。

茨城選抜×全静岡もともに強力だ。この勝者と福岡戦が優勝争いの一つのヤマ。

鹿児島にしても楽観は許せない新居浜工（愛媛）の調子は上向きだインターハイで隼人工に負けているだけに同校にとって再戦は願ってもないチャンス。奈良選抜、富山選抜、函館有斗（北海道）のまとまりも侮るわけにはいかない。



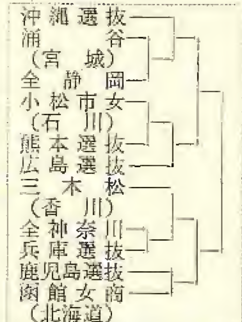
強豪ひしめくAゾーン

◆高校女子（11チーム）インターハイでの波乱がそのまま持ちこされそうな気配。どこが勝っても初優勝である。

夏の戦いぶりからすればベストエイト校から唯一校国体に登場した涌谷（宮城）を一番手にあげるべきだろうが、このゾーンは全静岡小松市女（石川）、熊本選抜、広島選抜と強者が並んだ。沖縄選抜も来春の特別国体（高校女子）を控えて張り切っている。

Bゾーンでは鹿児島選抜×函館女商（北海道）の勝者か。強化の成果を着実にあげる鹿児島も、函館の粘りには苦しみそう。兵庫選抜の全神奈川も激戦地区を勝ち抜いて自信をつけ、三木松（香川）は単独の有利さがある。

激しい星のつぶしあいから、結局はAゾーンの進出校に栄冠が落ちつくと思う。



スワロー兵庫、連勝に闘志

◆教員（10チーム）前年と同ようチャンピオンの大阪イーグルスが近畿予選でスワロー兵庫に倒された。

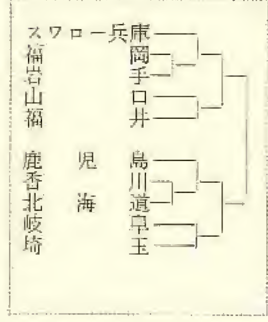
その実力、全日本教職員準優勝という成績からもスワロー兵庫が最有力である。

ベテラン北山を軸に井上、畑、木野、黒田、中村、浜野らの攻撃陣はスピードも充分だし切れ味鋭いテクニックをもつ。GK上野も相変らず元気だ。

対抗はやはり埼玉。前年は決勝でスワローと延長（13—16）、雪じょくの闘志に燃えている。左腕・北井が健在だし河住、高田、高戸結城、GK高橋らソツのない攻守を誇る。順当にいけばスワロー戦を前に、ダークホース鹿児島と準決勝を争う。

このところめっきり腕をあげている鹿児島は平山、田上、山口らの攻撃陣が先制に成功するともつれそうだ。

このほか前年3位の福井をはじめ福岡、岐阜、2年ぶりで登場の北海道あたりが安定しているようだが、優勝争いへ加わるにはもう一つたくましさに欠ける感じ。



5連勝狙う大洋デパート

勝機つかむか東京重機

◆一般女子（11チーム）5連勝を狙う大洋デパート（熊本）が焦点だ。NHK杯（6月）、全日本実業

団(7月)とすでに2冠。3度目の4冠王へアタックを開始しただけに張り切りようはいっそうと伝えられる。
GK小原、垂水、米、島田、釼蔵田、加子崎ら不動のメンバー。
大洋の難敵は東京重機(東京)。重機は全日本実業団では10—13と善戦。この時は主戦GK長岡を負傷で欠いていた。牧野、古佐原、松木、村上、市川、葛西ら主力は着実に力を伸ばし「大洋と五分」の声も聞かれる。固くなりさえしなければ勝機も生まれよう。重機はそこまでの間に東北ムネカタ(福島)、田村紡(三重)と当たる。どちらも簡単にいける相手ではないが、ここでてこずっていては大洋戦も覚束ない。
Bゾーンは日本ビクター(茨城)×ブラザー工業(愛知)がみもの。去年の全日本総合決勝の再現である。この時も、今夏の全日本実業団もビクターが制し優位に立っているが、ブラザーの進境は注目してよいものがある。藤浪、鳥居、森本らの攻撃力は一流で、特に鳥居の成長は目を見はらされる。ビクターも安定しているが、キープレイヤーの蓮見姉の退陣がひびきそうだ。
前回、ブラザーを破りベスト4へ躍りでた徳山高OG(山口)がシードされた。一般女子でクラブチームがシード扱いをうけたのは久しぶりのことではなかろうか。
クラブチームの固まったパートの中から勝ち進み4位を確保したいところだが、鹿児島クが練習量充分でその座を狙っている。
このほか大谷ク(大阪)、新居浜ク(愛媛)、高岡女ク(富山)らが情熱だけを支えにして登場して来た。
今回の組み合せは一般女子だけ意識的に出場チームの色分けが行われたようで、その是非はともかく、いまやOGクラブの唯一の目標となった感じのこの大会だけに5クラブの健闘を期待しておきたい。

湧永薬品(大阪)
清商ク(静岡)
氷見ク(富山)
自衛隊勝田(茨城)
盛岡商友会(岩手)
佐世保ク(長崎)
神戸製鋼(兵庫)
高知ク
北陸電力(福井)
岩瀬農OB(福島)
海上自衛隊第1航空群(鹿児島)
日新製鋼呉(広島)
添上ク(奈良)
全神奈川
本田技研(三重)
大崎電気(埼玉)
昭和電工ク(大分)
青森ク
金沢市役所(石川)
全京都ク
塩山ク(山梨)
住友化学菊本(愛媛)
大同製鋼(愛知)
AOK栃木
古川工OB(宮城)
丸善石油下津(和歌山)
徳山ク(山口)
熊城会(熊本)
三景(東京)

大洋デパート(熊本)
大谷ク(大阪)
新居浜ク(愛媛)
東京重機(東京)
東北ムネカタ(福島)
田村紡(三重)

徳山高OG(山口)
高岡女ク(富山)
鹿児島ク
ブラザー工業(愛知)
日本ビクター(茨城)

群抜く実業団上位勢

◆一般男子(29チーム) 優勝候補は全日本実業団上位リーグの湧永薬品(大阪)、三景(東京)、大崎電気(埼玉)、本田技研(三重)、大同製鋼(愛知)、住友化学菊本(愛媛)それに全日本自衛隊優勝の海上自衛隊第一航空群(鹿児島)、実業団の中堅・丸善石油下津(和歌山)、日新製鋼呉(広島)、神戸製鋼(兵庫)あたりで、クラブ勢は全神奈川を除いてはいつになく旗色が悪い。このなかからズバリ準決勝のカードを予想すると湧永×本田、大崎×大同だ。くずれるとすれば前年2位の巧者・三景(東京)が大同を制すケース。
2連勝めざす湧永は木野、早川大崎は近森、飯田、下里、本田は新実、大同は野田、中井とオリンピック代表がキープレイヤーで、このほか大崎には東、荒井、本田には佐藤、大同には藤市らのナショナルプレイヤーが顔を並べる。
三景も手強い。ナショナルプレイヤーの高梨を軸に喜田、内藤、植川、武井、GK西牧らでまとまっている。本田技研にとっては全神奈川の存在が油断できぬ。大山、植木、小野口、尾島、GK井上らを攻守の要に配している。
クラブ勢では全京都ク、佐世保ク(長崎)、盛岡商友会(岩手)、高知クらが比較的クジ運に恵れ上位を狙える。清商ク(静岡)×氷見ク(富山)と徳山ク(山口)×熊城(ゆうき)会=熊本市商OBは1回戦屈指の好カード。元気者AOK栃木も緒戦が大同製鋼とでは辛い。初出場組のなかでは岩瀬農OB(福島)が好調のようだ。
◆得点争い 天皇杯=北海道の2部門棄権から唯一のフルエントリー県・地元鹿児島が手固くポイントをあげて優勢だ。追うのは2部門優勝の望みをもつ埼玉、愛知、宮城、茨城あたり。このほか兵庫熊本、三重、山口が圏内か。
皇后杯=2部門に出ているのは熊本と鹿児島。切り札のある熊本が今年も有力だ。あとは混戦。

国体・地域代表決定試合記録(太字は代表)

◆北海道
▽一般男子=本大会不出場
函館有斗OB 22—9 自衛隊釧路
▽一般女子=本大会不出場
室蘭ク 24—6 函館商OG
▽高校男子
函館有斗 11—8 室蘭工
▽高校女子
函館女商 7—4 室蘭商
▽教員選考試合
教員団B 16—14 教員団A
◆東北
▽一般男子第1・第2代表決定リーグ
青森ク(青森) 23—15 岩瀬農OB(福島)
岩瀬農OB 15—11 古川工OB(宮城)
青森ク 21—12 古川工OB
▽同第3代表決定リーグ
盛岡商友会(岩手) 15—9 新庄ク(山形)
盛岡商友会 15—9 大農ク(秋田)
大農ク 17—10 新庄ク
▽同第4代表決定戦
古川工OB 24—12 大農ク
▽一般女子
全和洋(秋田) 17—6 全涌谷(宮城)
▽高校男子
仙台育英(宮城) 9—8 全秋田
▽高校女子

涌谷（宮城） 5―4 和洋女（秋田）
▽教員
岩手 17―16 福島

◆関東
▽一般男子第1～第4代表決定戦
AOK栃木（栃木） 30―8 塩山ク（山梨）
大崎電気（埼玉） 24―9 自衛隊勝田（茨城）
全神奈川 25―11 海上自衛隊下総（千葉）
三景（東京） 32―11 甘楽ク（群馬）
▽同第5・第6代表決定戦
塩山ク 14―13 甘楽ク
自衛隊勝田 23―7 海上自衛隊下総
▽一般女子第1・第2代表決定戦
日本ビクター（茨城） 31―0 全神奈川
東京重機（東京） 15―10 大崎電気（埼玉）
▽高校男子
茨城選抜 13（延）12 東京選抜
▽高校女子
全神奈川 8―6 茨城選抜
▽教員
埼玉 20―9 千葉

◆北信越
▽一般男子第1・第2代表決定戦
氷見ク（富山） 22―10 金沢市役所（石川）
北陸電力（福井） 没収試合 長野USY（長野）
（注）試合は13―10で長野USYが勝ったが同チームに学生が出場していたため試合を没収された。
▽同第3代表決定戦
金沢市役所 25―3 柏崎ク（新潟）
▽一般女子
高岡女子ク（富山） 9―5 小松市女OG（石川）
▽高校男子
富山選抜 13―6 上田（長野）
▽高校女子
小松市女（石川） 6―4 長野選抜
▽教員
福井 31―19 長野

◆東海
▽一般男子第1・第2代表決定戦
本田技研（三重） 18―11 清商ク（静岡）
大同製鋼（愛知） 21―11 岐阜選抜
▽同第3代表決定戦
清商ク 15―9 岐阜選抜
▽一般女子第1・第2代表決定リーグ
ブラザー工業（愛知） 12―6 静岡城北ク（静岡）
田村紡（三重） 20―4 全岐阜
ブラザー工業 16―3 全岐阜
田村紡 27―6 静岡城北ク
静岡城北ク 14―6 全岐阜
ブラザー工業 8―7 田村紡
▽高校男子
全静岡 16―10 中京（愛知）
▽高校女子
全静岡 7―6 高蔵（愛知）
▽教員
岐阜 10―9 愛知

◆近畿
▽一般男子第1～第3代表決定戦
湧永薬品（大阪） 26―9 丸善石油下津（和歌山）
神戸製鋼（兵庫） 28―18 添上ク（奈良）
全京都ク（京都） 29―16 守山ク（滋賀）
▽同第4～第5代表決定リーグ
丸善石油下津 28―16 添上ク
添上ク 17（分）17 守山ク
丸善石油下津 23―11 守山ク
（注）添上クと守山クは得点数比
▽一般女子
大谷ク（大阪） 12―4 全明徳（京都）
▽高校男子
奈良選抜 15―10 和歌山選抜
▽高校女子
兵庫選抜 8（延）7 大阪選抜
▽教員
スワロー兵庫 39―23 京都
（注）全日本教職員選手権（8月）優勝の大阪イーグルスは準決勝でスワロー兵庫に12―14で敗れた。

◆中国
▽一般男子第1・第2代表決定戦
徳山ク（山口） 22―14 全倉敷（岡山）
日新製鋼呉（広島） 19―9 境港市役所（鳥取）
▽一般女子
徳山高OG（山口） 8（延）7 山陽女OG（広島）
▽高校男子
下関中央工（山口） 15―6 岡山選抜
▽高校女子
広島選抜 11―5 山口中央（山口）
▽教員
山口 16―11 岡山

◆四国
▽一般男子第1・第2代表決定リーグ
住友化学菊本（愛媛） 31―7 高松ク（香川）
住友化学菊本 26―9 高知ク
高知ク 17―13 高松ク
▽一般女子（リーグ）
高松女商OG（香川） 9―7 高知ク
新居浜ク（愛媛） 9―4 高松女商OG
新居浜ク 20―5 高知ク
▽高校男子
新居浜工（愛媛） 11―9 坂出工（香川）
▽高校女子（リーグ）
三本松（香川） 13―4 松山商（愛媛）
三本松 8―4 城山（高知）
松山商 10―2 城山
▽教員
香川 19―7 愛媛

◆九州
▽一般男子代表（3）決定リーグ
佐世保ク（長崎） 20―13 ブリジストン（福岡）
昭和電工ク（大分） 25―10 ブリジストン
熊城会（熊本） 17―16 昭和電工ク
佐世保ク 19―15 延岡ク（宮崎）
熊城会 25―7 延岡ク
佐世保ク 16―9 昭和電工ク
熊城会 24―16 ブリジストン
昭和電工ク 16―14 延岡ク
熊城会 17―16 佐世保ク
ブリジストン 31―12 延岡ク
【順位】①**熊城会**②**佐世保ク**③**昭和電工ク**④ブリジストン⑤延岡ク
▽一般女子
大洋デパート（熊本）＝認定
▽高校男子
福岡選抜 21―17 大分選抜
▽高校女子
熊本選抜 9―6 大分選抜
▽教員
福岡 25―10 長崎

大同製鋼が初優勝飾る

【速報】第13回全日本実業団男子選手権は9月27日から10月1日まで名古屋市体育館に強豪8チームが参加して行われた。

予選リーグ（2組）から予想どおり大崎電気、湧永薬品、大同製鋼三景が勝ちあがり、決勝リーグは6試合のうち4試合が引き分けという大激戦だったが、結局大同製鋼、大崎電気が1勝2分の同率、得失点差で大同の初優勝に決まった。（詳報次号）

男女とも東軍3連勝

秋のハンドボールシーズン開幕を飾る第22回（女子第4回）全日本学生選抜東西対抗戦は9月15日午後1時30分から名古屋・愛知県体育館で行われた。

男子は西軍の健闘から好試合となったが東軍は残り1分で決勝の2点をあげ辛勝、3年連続の優勝を飾り、通算成績を14勝8敗とした。

女子は東軍が一方勝ち、3連勝で通算成績を3勝1敗とした。

西軍、終盤に主導権渡す

男子対抗戦は午後3時30分から浅野克彦、赤松英男両氏審判で開始。

東　軍 16（5−7, 11−7）14 西　軍

【東日本】	得		【西日本】	得
GK 佐藤（法政）	0		GK 福井（中京）	0
GK 山田（中央）	0		GK 宍倉（大阪体大）	0
FP 花輪（中央）	0		FP 中村（大阪体大）	3
FP 佐々木（中央）	2		FP 福永（大阪体大）	1
FP 松岡（日体）	6		FP 中出（大阪体大）	1
FP 田上（法政）	1		FP 穂積（大阪経大）	2
FP 白石（中央）	2		FP 飼沼（名城）	1
FP 加藤（早稲田）	1		FP 夏目（中京）	1
FP 村田（中央）	2		FP 阪本（大阪体大）	1
FP 内尾（金沢工大）	0		FP 白柳（大阪体大）	3
FP 照井（東北工大）	0		FP 山内（大阪体大）	0
FP 浅原（日体）	1		FP 成田（中京）	1
16	（3）	7MT	（2）	14

▽FPその他の出場者　【東】山村（中央）得1、田中（中央）得0

【後記】西軍のスロー・オフで始った一戦は立ちあがり西軍にやや固さが見られ、西軍のわずかなミスプレーから、東軍は早々と2点を先取した。機先を制するという意味では西軍の苦戦が感じられた。

しかし、この日の西軍は固さが解れ、動きにリズムのでて来た5分後から反撃に転じ、ベンチの明るいムードも手伝って、8分までに2−2と追いつき、12分に得た7mTで逆転した。このあたりからゲームは白熱化し、シーソーゲームの様相から24分西軍飼沼のすばらしいダッシュで5−5の均衡を破り、続いて成田が防御の間を破って7−5とリードして前半を終った。前半の西軍は、ベンチの好采配によって速攻とセットの配分と速い帰陣など、慎重なゲーム運びに加えて、GK福井の再三の好守によるところが大きかった。

後半両軍ベンチの虚々実々の采配が、ゲームの主導権争いを生み、一層ゲームを幅広く展開させる結果となり26分14−14。スピーディーなプレーでスタンドは興奮の坩堝と化した。

東軍の勝利は、後半15分〜20分に4点を連取した気力であり、その遠因がオリンピック帰りのエース佐々木の巧技であった。敗れはしたが西軍の健闘は称賛に値するものであり、22回大会は、観衆を魅了させた好ゲームであったといえよう。

学生東西対抗
後記・宇津野年一

力の差ははっきり示す

女子対抗戦は午後2時から林藤吉、河野好央両氏審判で開始。

東　軍 15（6−1, 9−1）2 西　軍

【東日本】	得		【西日本】	得
GK 大工原（日体）	0		GK 田中（甲子園）	0
GK 松井（東京教大）	0		GK 横井（中京）	0
FP 嶋田（日体）	3		FP 花谷（大阪体大）	0
FP 赤塚（日体）	3		FP 周防（大阪体大）	0
FP 木村（日体）	0		FP 堀川（大阪体大）	0
FP 福田（日体）	1		FP 宮田（中京）	0
FP 小貫（日体）	0		FP 田島（中京）	0
FP 岩本（日体）	0		FP 佐竹（中京）	1
FP 小林（日体）	2		FP 臼井（甲子園）	0
FP 岡田（東京教大）	5		FP 乗正房（甲子園）	0
FP 畑中（東京教大）	1		FP 安井（中京女）	0
FP 西田（東女体大）	0		FP 竹内（甲子園）	1
15	（4）	7MT	（0）	2

▽FPその他の出場者　【西】太田、平田、木下（いずれも甲子園）得0

【後記】　速さの東軍に対し、西軍が如何に戦うか、これがこの一戦のポイントと見られていたが、結果は走力・体力・基礎技能などにすぐれる東軍の圧勝といろ感じであった。しかし、東軍のコンビもニューボールの滑りからかミスプレーが目立ち、決して東軍本来のできではなかったように見られた。東軍は開始後3分赤塚のゲットを契機として、西軍のミスを衝いて速攻で押しまくったという内容であった。その間西軍は、挽回を計って後半メンバーを一新したが、26分竹内の得点で気勢をあげたものの、東軍バックスの早い当りに潰されて後が続かず、再度のスタメン切り替えも、後半5分以降は東軍の独壇場であって、西軍は24分間1点もとれず惨敗した。

敗れた西軍は、攻撃がパスワークのためのパスに終始し、突進力に欠けていたことが、東軍バックスに攻撃を読まれ、楽々とインターセプトされ、無理にシュートを打たされ、簡単に点を許す結果となっていた。今一つ西軍ベンチが、後半に挽回を策して起用したメンバーを、今しばらく押して見たならば、多くの観衆にアピールできたように思ったのは、私だけではなかったように思うが。（筆者は全日本学連審判部長、日本協会技術指導部委員）

男子で京都産大初優勝

◆関西学生新人戦（6月・大阪体大）

▽男子準々決勝
大阪経大 19−4 甲　南
大　阪　大 15−7 和歌山大
京都産大 26−4 京都教大
大阪体大 13−4 近　畿　大

▽同準決勝
大阪経大 16−13 大　阪　大
京都産大 10−7 大阪体大

▽同決勝
京都産大 7（4−0, 3−4）4 大阪経大

▽女子1回戦（1試合）
武　庫　川 7−6 大阪薬大

▽同準決勝
甲　子　園 12−1 武　庫　川
大阪体大 8−6 大阪教大

▽同決勝
甲　子　園 10（4−2, 6−1）3 大阪体大

大学定期戦

▼第12回関大−中京（9月3日・中京大豊田体育館）
中　京 23（10−5, 13−7）12 関　大
通算成績は中京大の6勝3敗2引分け（1中止）

▼第22回早稲田−慶応（9月23日早大記念会堂）
早　稲　田 23（11−8, 12−8）16 慶　応
早稲田は6連勝、通算成績は早稲田の13勝7敗。

「ミュンヘン・11位」の反省

早急に新強化路線

注目される執行部の姿勢

日本協会は9月26日夜体協でオリンピック後初の月例常務理事会を開き、ミュンヘン大会の反省と今後の頂点強化について約2時間にわたり話合った。

日本協会は6年前からオリンピック路線に踏み出し、42年以降3期にわたる執行部は頂点強化へ全国的な協力体制を要望、昨秋のアジア予選開催にともなう協賛事業や、登録料、加盟金の値上げ、さらには協力金の徴収などを進めて来た。

それだけに「11位」という現実をどうとらえ、世論に対処していくか注目されていたものだが、この日は村田オリンピック対策部長竹野コーチ(特別出席)のほか荒川理事長、神田、田中滋、久田各常務理事らミュンヘン見学役員による報告が主で、執行部の姿勢を打ち出すまでにはいたらなかった。

席上、荒川理事長はミュンヘンの成績を「価値ある反省」とするために、回顧と併行して2年後の第8回世界男子、4年後のモントリオール・オリンピックへの強化準備を早急にスタートさせることを明きらかにし、関連施策として技術、審判、普及部からの代表者と有識者を加えた「技術委員会」を新設する構想があると述べた。

また、神田、田中滋常務理事は強化対策始動時点に逆のぼり、強化合宿内容を加えた細かいリポートの作成をコーチングスタッフに要求した。

次回(10月14日)でも改めて報告と検討が行われる予定だが、出席した各常務理事も「ミュンヘン」を新しいスタート台とすることに異論はないようなので、焦点は国内ムードにのって強行した施策に対する〝処理〟にしぼられよう。

なお、当初の予定どおりオリンピック対策部は、リポート作成などの業務を引きつづき行うが、実質的には10月15日の全国理事会まで解散することに決まった。

これにより、今後の頂点強化はとりあえず技術指導部を軸に、新しい視野に立って進められるものとみられ、早ければ15日の全国理事会で具体的な線が浮かびあがるだろう。

10月15日に全国理事会

日本協会は10月15日午前10時から東京・岸記念体育会館(体協)で全国理事会を開く。全国評議員会については未定。

中大附属高も出場

12月の全日本総合選手権

日本協会は9月26日の月例常務理事会で12月6日から10日まで東京体育館で開く第24回全日本総合選手権の出場チーム数とその推せん内訳けを別表のように発表した。この数字は2月12日の全国評議員会で確定していたもの。

すでに全国高体連は男子の中大付属高(東京・全日本高校選手権優勝)の出場を発表しており、超高校級といわれる同校の登場は注目に価する。女子の深谷女高(埼玉・同)は出場しない模様。

代表数内訳け

	男	女
日本協会推せん（前年度優秀）	2	2
全日本学連推せん	4	2
全日本実連推せん	3	4
全日本教職連推せん	2	…
全日本自衛隊連推せん	1	…
全国高体連推せん	1	1
社会人代表	2	1
次年度国体開催地代表	…	1
開催地(東京)代表	1	1
計	16	12

なお、日本協会推せんによる前年度優秀チームは、男子は大崎電気(埼玉)、湧永薬品(大阪)、女子は日本ビクター(茨城)、ブラザー工業(愛知)である。女子は予選トーナメント決勝の敗者3チームによって「4～6位決定リーグ」も行う。

中学問題委(仮称)設置へ

日本協会は、全国中学生大会の運営を含めた中学生問題一切を処理するため、来年度から新たに執行部内へ「中学問題委員会(仮称)」を設けることに決めた。

今年度は、普及部が中学問題をすべてかかえていたもので専門パートの確立は懸案であった。スタッフなどについては、今後なお検討を加える。

沖縄は九州地区…国体 日本体協国体委員会は〝沖縄復帰〟にともない来年以降、沖縄県は国体出場の場合、九州地区予選を経て代表チームを送るように総則の一部を改正する。

日本協会も規約改正へ 日本協会は沖縄の本土復帰により規約の一部改正を準備している。最も大きな点は、沖縄県を九州ブロックへ組み入れることにより、沖縄協会から日本協会へ送られていた理事が無くなり、この影響で日本協会理事数は33名（地域選出9加盟団体10、会長推せん14）と2名減になることだ。

「女子ナショナル」近く新編成へ

日本協会技術指導部は9月17日東京で中央本部委員会を開き、今後の男女強化問題、ジュニアナショナル（仮称・男子のみ）編成などについて話しあった。

特に女子の強化については、来年11月ユーゴで世界選手権が開催され、さらにオリンピックでの実施が伝えられているなどから早急に具体的な頂点強化対策をこうじ、とりあえず10月中旬までに新しい「女子ナショナルチーム」のメンバー（30名の予定）を発表することに決めた。

「女子ナショナル」は昨冬の世界選手権代表14名（GK2、FP12）が新年度にも入れ替えることなくそのままになっていたもので、遅ればせながら「47年度ナショナル」編成の見通しがついた。

女子五輪、いぜん流動的

本誌既報のとおり国際オリンピック委員会（IOC）はミュンヘンにおける第73回総会で、女子ハンドボールをオリンピックで実施することに決めたが、ミュンヘンから帰国した日本協会関係者などの話を総合するとこの問題はいぜん流動的で、国際ハンドボール連盟（IHF）やカナダ協会筋の動きが今後の大きなカギになりそうである。

◇

〈解説〉拡がるばかりのオリンピック。ブランデージ前会長もキラニン新会長も「規模縮小」を提唱しており、そうした空気の中で女子ハンドボールがオリンピックに加えられるとはIHFも想像していなかったようだ。去年のくれ開いたばかりの世界選手権を来年行うのも「オリンピックの翌年に女子の世界選手権」というパターンをつくりあげようとしたからだ。

IHFとしては、あくまで「ハンドボールのオリンピック定着」が〝宿願〟であり、女子実施の働きかけは後まわしにしていた。

今回のIOCの決定は当然歓迎されてよいわけだが、それによって男子の参加国数が減少すること（12または10。ミュンヘンは16）に難色を示す意見があり、一部には「女子はもう少し先でよいから男子を16のままで」という声も強い。次大会開催地モントリオール（カナダ）にしても、ここで女子が増えることは、諸準備に影響してくる。ある消息通は「モントリオールは男子12で計画していたようだ」と語る。

渡辺副会長や荒川理事長は「カナダ協会関係者の話を聞いていると男女18となればハンドボールそのものの実施が再検討されかねない」といっており、男子までも放り出される心配がないとはいえぬ。2年後ウイーンに予定されるIOC総会が一つのヤマだ。

もともとカナダハンドボール界の勢力はそう強いものではなく、組織力も弱体なようで、たしかに男女18というのは負担だろう。

IOC—IHF—モントリオール組織委—カナダ協会の〝四角関係〟をこのあとどう調整するか、正式決定までには時間がかかりそう。（S）

名実ともに一流の〝内容〟を

全日本学生東西対抗から

読者投書欄 明日への提言

毎年9月、名古屋で行われる恒例のビッグエベント・全日本学生選抜東西対抗を、ここ数年子供を連れて観戦することを一つの楽しみにしているが、今年の大会（9月15日）で残念なことが見受けられた。

その一つは東軍が男女ともそのユニホームに胸番号がついていないことであった。関東の大学を中心として編成され、しかも指導者は日本協会の中心者でありながら、ルール上明記されていることを学生界最高のこの対抗戦で違反しているのは観戦に来た中学、高校生徒がどのように思って帰ったことであろうか。

第二に思った点は、反則をとられ相手にフリースローが与えられた時のボールの扱いかただ。帰陣すべく走りながら相手にボールを渡さないような態度が男女の試合中に多くみられたのはどうかと思う。反則地点にすみやかに置くなり渡すなりするマナーを失っていでは観衆に不快な念をいだかすばかりである。

底辺拡大を目指している私たちは子供たちによいプレーを見させ指導してゆきたいのだが、「最高レベル」といわれる試合中にこうした失態がおこるのは悪い影響を及ぼすものと心配する。関係者においては指導を強化し名実ともに「最高」「一流」の内容の試合ができるよう努力して欲しいものである【名古屋・西川勤也・愛知小学生ハンドボールスクール代表】

☆…九州選手権あれこれ…☆

平仲孝栄
（沖縄協会理事長・投稿）

太平洋戦争の残した傷跡で沖縄県は祖国より切り離されて異民族支配の下に苦しみ、日本国憲法の届かない生活を強いられて27年、ようやく今年5月15日に100万県民の願望である祖国復帰が曲がりなりにも実現をした。

復帰7年前、昭和40年にハンドボール協会設立、ハンドボール競技を県体協、県高体連の正式種目として採りいれ歴史の浅い本県ハンドボール界としては普及発展と九州各県の愛好者が復帰した本県に集ってもらい親睦を企るとともにいろいろの面で御協力と助言を迎じ目的で第8回九州選手権と第2回九州女子クラブ大会（ともに九州ハンドボール協会主催）を本年7月23、24日に本県那覇市で開くべくその計画を昨年の5月、九州協会理事会に提案し決定をみたのであります。

爾来、100万円の予算を計上、開催地の那覇市、県教育委員会に対し協力もお願いし準備を進めて参りました。準備も関係者各位の絶大な御協力により着々と進められ参加申しこみも男子は13チーム、女子は5クラブを数え、競技、会場、宿泊関係、プログラム、優勝杯（那覇市長杯）その他準備万端整えいよいよ21、22日2便に分かれて来島する選手団を迎えるべく満を持している時、一方、参加チームは鹿児島、福岡に集結し沖縄へ心を馳せている時、はからずも台風7号の接近で予定の日に出発できず止むを得ず九州協会と連絡の上順延にしたが、台風7号は〃台風銀座〃の本県でさえも未だかって遇ったことのない悪質で進路を、台湾—沖縄—九州本島をいったり来たりして、とうとう26日まで延びても開くことができなくなりました。

これ以上の順延はインター・ハイ、全日本教職員選手権大会などの関係でムリ、以後のことは後日九州協会で話合うことになり、折角の機会が一応断たれてしまった。

それとは別に7月8日に組合せが決まりマスコミが組合せを報道いよいよ大会開催へ突走っている時、20日某新聞社から大会実行委員会に電話があり、その新聞社は21日付の紙面で「参加チームの中には鹿児島県代表として第一航空群海上自衛隊チームと長崎県代表として佐世保海上自衛隊チームが参加する」のを記事としてとりあげたのである。

これを知った沖縄県教組と沖縄県高教組から「かねてより本県への自衛隊配備に反対する運動を推進しているので自衛隊の今大会への参加は形を変えた宣撫工作であるとして自衛隊チームの来県に反対、自衛隊チームの来県を取りやめてくれ」との要請がありました。

当協会としては県民の反自衛隊感情の強いこともよく判る。（しかしスポーツへの自衛隊参加に反対するとは考えなかった）が、主催者でない本県協会が、他の県代表として参加する権利をもつチームに対し「参加するな」ということはできないし、本協会としてはあくまでこの大会は「政治、イデオロギーを抜きにし、申しこみ全チームの参加の下に純粋なスポーツとして運営をして行きたい」と話し合いして私達の立ち場を了解してもらった。

そこで両教組はそれでは沖縄県代表の教員チームと教員が入っている琉球大学OBチームを自衛隊チームと対戦させないため説得して大会参加をボイコットさせてくれと話して来た。

本協会としては「沖縄教員チームや琉大OBのメンバーは成人で学識もあり良識をもっているので参加、不参加についてはとやかく云うことはできない。協会としては運営を主に考えるべきでそのチームの参加は監督、選手に任せる以外にない」と答え、後に真意をただしたところ「我々も県協会の判断と同じであり大会に参加する」ということでありました。以上のことで両教組はその後何ともいって来ませんでした。

こんどは会場である県高教組小禄高校分会では「大会の沖縄県開催に反対でなく協力もするし、会場も借すが自衛隊チームの試合だけは小禄高校ではやってくれるな。もし強行するなら他にも依頼し実力でも阻止する」と云って来た。主管である本協会も運営面からこれには困り、会場を二会場に分け、自衛隊の入っているブロックを主会場（奥武山運動公園内南側埋立地）で、他のブロックを第二会場（小禄高校）で行なうことで話合いがまとまり、特にスムーズな大会運営ができるように各方面と連絡をとり、協力を要請して準備を進めたわけでありますが、しかし前に書きましたように台風7号によって26日まで開会ができなくなったわけであります。

さて、次は「お預け」になった今大会をどうするかで、8月1、2日に山形県東根市（全日本高校選手権開催地）で九州協会理事会が開かれ、その会議で8月26、27日再開が決まりました。再大会は参加男子5、女子2に減ってしまいました。その理由は本県を除く他7県のチームは福岡や鹿児島に集結し出発に備えたが台風のため二～三泊しても出られず、その上延期ということで派遣費の面や職場との関係、あるいは選手の日程の都合などで不参加をしたと思います。これは私の思いすぎかも知れませんが、もし仮にも自衛隊云々で不参加をしたチームがあったとするなら実に残念でなりません。

何故なら大会参加者に迷惑をかけずにいろいろ準備、手配をしあらゆる協力を払ってスムースに大会が運べるような見通しをもっていたからであります。

最後に一言強調したいことがあります。それは東京や千葉の全日本教職員選手権大会時や九州あたりで「本県教員チームが自衛隊との試合をボイコットする」という話があったと聞いてびっくりしているところであります。それは全くデマ・中傷で真実は前にも書きましたとおり教員チームはもちろん、琉大OBチームも本協会の判断や考えかたに賛同し大会参加は当然のこと、自衛隊とも試合をするという態度で一貫していました。このことと併せて今回の大会のいきさつをあえて強く訴え、誤解のないようペンをとりました。

九州産大、福岡教大降す

第22回九州地区大学体育大会ハンドボール競技は7月13、14日の両日福岡・小倉体育館などに16校が参加してトーナメントで行われ予想どおり九州産大と福岡教大の決勝から九州産大が前半の優位を守り快勝、九州学生春季につづいて今シーズン二つ目のタイトルを獲得した。

▽1回戦
西南学院 18（6―2 12―2）4 福岡工大
福岡教大 15（4―3 11―5）8 鹿児島大
熊本商大 17（7―3 10―5）8 九州工大
琉球大 19（9―3 10―4）7 大分大
九州産大 26（11―3 15―10）13 熊本工大
熊本大 25（13―3 12―4）7 東和
福岡大 20（10―5 10―7）12 長崎大
東海 17（8―2 9―4）6 長崎造船

▽準々決勝
福岡教大 13（7―3 6―4）7 西南学院
熊本商大 16（5―4 11―1）5 琉球大
九州産大 18（9―5 9―7）12 熊本大
福岡大 14（6―3 8―6）9 東海

▽準決勝
福岡教大 14（6―8 8―3）11 熊本商大
九州産大 24（15―6 9―11）17 福岡大

▽3位決定戦
福岡大 22（10―5 6―11 3―3 3―2）21 熊本商大

▽決勝
九州産大 16（8―5 8―7）12 福岡教大

各地の記録

重機、ビクター破り優勝
男子で光る全神奈川

第19回関東選手権は8月26、27日の両日浦和市に男子8、女子6チームが参加して行われた。

男子は前年優勝の三景(東京)が準決勝で全神奈川の元気な試合ぶりにあって逆転負け。決勝は大崎電気(埼玉)と全神奈川が争い、大崎は主力3人をオリンピックへ送りながらソツのない攻守で制勝、2年ぶり12度目の優勝をとげた。

女子は予想どおり実業団勢が強く東京重機(東京)、日本ビクター(茨城)が決勝で対戦、前半のリードを保った重機が辛くもビクターの反撃をかわし2年ぶり2度目の優勝を飾った。

▽男子1回戦
栃木AOK(栃木) 30（15―3 15―5）8 塩山ク(山梨)
大崎電気(埼玉) 24（11―4 13―5）9 自衛隊勝田(茨城)
全神奈川 25（12―3 13―8）11 海上自衛隊千葉
三景(東京) 32（13―4 19―7）11 甘楽ク(群馬)

▽同準決勝
大崎電気 22（10―4 12―9）13 栃木AOK
全神奈川 19（7―8 12―4）12 三景

▽同決勝
大崎電気 17（7―4 10―6）10 全神奈川

▽女子1回戦（2試合）
全神奈川 14（8―3 6―7）10 前橋ピジョンズ(群馬)
東京重機(東京) 16（7―0 9―2）2 扇屋(千葉)

▽同準決勝
日本ビクター(茨城) 31（14―0 17―0）0 全神奈川
東京重機 15（6―4 9―6）10 大崎電気

▽同決勝
東京重機 14（8―6 6―7）13 日本ビクター

大同製鋼が初優勝
女子はブラザーが全勝

第24回東海選手権は8月26、27日名古屋・愛知県体育館に男女各県代表4チームづつが集り男子はトーナメント、女子はリーグ戦で行われた。

男子は本田技研(三重)―大同製鋼(愛知)と前年同ようの決勝から大同が後半走り勝ち初優勝した。

女子はブラザー工業(愛知)、田村紡(三重)が強力な布陣で勝ち進み、両者の対戦は1点を争う好ゲームとなったが、わずかにブラザーが押し気味で辛勝、田村紡の5連勝を阻み初優勝した。愛知代表の男女優勝は5年ぶり。

▽男子準決勝（=1回戦）
本田技研(三重) 18（9―7 9―4）11 清商ク(静岡)
大同製鋼(愛知) 21（11―7 10―4）11 岐阜選抜

▽同3位決定戦
清商ク 15―9 岐阜選抜

▽同決勝
大同製鋼 14（6―7 8―3）10 本田技研

▽女子リーグ
ブラザー工業(愛知) 12―6 静岡城北ク(静岡)
田村紡(三重) 20―4 全岐阜
ブラザー工業 16―3 全岐阜
田村紡 27―6 静岡城北ク
静岡城北ク 14―6 全岐阜
ブラザー工業 8（7―5 1―2）7 田村紡

【順位】①ブラザー工業②田村紡③静岡城北ク④全岐阜

沖縄で九州選手権開く

第8回九州選手権(男子のみ)は

8月26、27日の両日沖縄・琉球大体育館に5チームが参加して行われ、大分教員が地元・沖縄教員を大接戦の末逆転で破り、6年ぶり2度目の優勝を飾った。この大会は7月末那覇市で開かれる予定のところ台風で中止となり、一ケ月遅れの〝開幕〟だった。そのため前年優勝の熊本教員ら5県の代表が出場を見合せ、せっかくの沖縄開催もさびしい内容になってしまった。

なお、同時に第2回九州女子クラブ大会が行われ佐賀クが勝った

▽1回戦（1試合）
大分教員 28（10－13、18－12）25 琉大ク（沖縄）

▽準決勝
沖縄教員 16（11－10、5－5）15 ブリジストン（福岡）
大分教員 20（8－7、12－8）15 那商ク（沖縄）

▽決勝
大分教員 22（7－12、15－7）19 沖縄教員

▼第2回九州女子クラブ大会＝2チーム参加
佐賀ク 14（8－6、6－4）10 中頭ク（沖縄）

男女とも県選抜順当勝ち

▼第27回岡山県体育大会高校ハンドボール競技（8月・真備高）

▽男子準々決勝
県選抜 21－3 矢掛
水島工 17－11 岡山工
倉敷商 18－4 倉敷工
天城 10－5 津山商

▽同準決勝
県選抜 20－4 水島工
倉敷商 10－7 天城

▽同決勝
県選抜 22（8－2、14－4）6 倉敷商

▽女子1回戦（2試合）
岡山女 9－6 井原
西大寺 11－3 青陵

▽同準決勝
県選抜 29－2 岡山女
真備 10－1 西大寺

▽同決勝
県選抜 27（10－3、17－2）5 真備

1部は都島工と春日丘

▼第27回大阪高校総合体育大会（8月・大阪）

▽男子1部決勝トーナメント準決勝
都島工 16－6 枚方
鳳 11－10 佐野工

▽同決勝
都島工 12（5－3、7－2）5 鳳

▽同2部決勝
北陽 21－14 三国ケ丘

▽同3部決勝
八尾 9－5 桃山

▽同4部決勝
関電学院 21－5 此花商

▽女子1部決勝リーグ
春日丘 3（分）3 住吉学園
春日丘 4－3 東大阪
東大阪 6－1 住吉学園
【順位】①春日丘②東大阪③住吉学園

▽同2部決勝リーグ
岸和田 5－3 豊中
豊中 6－5 鶴見商
岸和田 5－2 鶴見商
【順位】①岸和田②豊中③鶴見商

▽同3部決勝リーグ
高津 4－1 和泉
門真 5－4 高津
門真 4－3 和泉
【順位】①門真②高津③和泉

大同製鋼8連勝飾る

▼愛知県実業団リーグ（9月・名古屋市体育館）＝男子のみ

▽1部
三友工業 17－13 新日鉄
大同製鋼 36－8 日本碍子
新日鉄 19－18 トヨタ車体
新日鉄 － トヨタ自工
三友工業 18－13 トヨタ自工
大同製鋼 32－5 トヨタ自工
トヨタ車体 31－14 トヨタ自工
トヨタ自工 － 日本碍子
大同製鋼 26－12 三友工業
大同製鋼 22－12 新日鉄
トヨタ車体 33－15 日本碍子
三友工業 13（分）13 日本碍子
新日鉄 33－14 日本碍子
トヨタ車体 24－10 三友工業
大同製鋼 26－19 トヨタ車体
【順位】①大同製鋼5戦全勝＝8連勝、10度目の優勝②トヨタ車体4勝1敗③三友工業④新日鉄名古屋⑤トヨタ自工⑥日本碍子

▽1・2部入れ替え戦
ブラザー工業（2部） 20－15 日本碍子（1部）

大東大原、花巻農に敗る

▼岩手県総合体育大会ハンドボール高校の部（8月・岩手大）

▽男子準決勝
花巻北 19－5 盛岡四
盛岡商 11－9 花巻農

▽同決勝
盛岡商 15（7－6、8－4）10 花巻北

▽女子準決勝
大東大原 6－5 黒沢尻南
花巻農 9－3 岩手女

▽同決勝
花巻農 12（7－1、5－4）5 大東大原

第27回国体県予選（報告分のみ）

▼広島

▽一般男子準決勝
日新製鋼呉 26－13 日本鋼管
三菱レ大竹 20－11 修道ク

▽同決勝
日新製鋼呉 25－14 三菱レ大竹

▼山梨

▽一般男子準決勝
塩山ク 11－4 昭和ク
日川ク 12－10 甲府ク

▽同決勝
塩山ク 13－9 日川ク

▽高校男子準々決勝

塩山 18－4 吉田
機山工 11－9 甲府南
韮崎工 11－9 甲府一
日川 17－8 園芸
▽同準決勝
日川 10－1 韮崎工
塩山 16－0 機山
▽同決勝
塩山 23－6 日川
▽高校女子1回戦（2試合）
山梨 14－3 日川
吉田商 9－7 甲府二
▽同準決勝
山梨 15－3 甲府商
塩山 10－7 吉田商
▽同決勝
山梨 12－3 塩山

▼青森
▽一般男子決勝リーグ
青森ク 30－10 うみねこク
上北ク 20－16 うみねこク
青森ク 23－9 上北ク
▽高校男子準々決勝
鰺ヶ沢 18－14 十和田工
三本木 18－11 青森商
青森東 18－17 七戸
柏木農 27－9 青森
▽同準決勝
鰺ヶ沢 9－6 柏木農
青森東 16－14 三本木
▽同決勝
鰺ヶ沢 21－10 青森東
▽高校女子準決勝
青森西 22－0 七戸
三本木 13－4 柏木農
▽同決勝
青森西 10－4 三本木

▼奈良
▽高校男子準々決勝
育英 11－8 桜井商
生駒 13－3 畝傍
添上 14－10 奈良
榛原 10－8 十津川
▽同準決勝
育英 14－13 榛原
生駒 9－8 添上
▽同決勝
生駒 18－7 育英
▽同女子準決勝
添上 14－3 郡山
桜井商 14－4 短大付
▽同決勝
添上 8－3 桜井商

中学大会記録

▼香川県中学大会（8月・高松）
▽男子準々決勝
附属高松 12－10 山田
光洋 15－10 香川
勝賀 13－9 竜雲
桜町 23－5 善通寺西
▽同準決勝
附属高松 10－9 光洋
桜町 19－7 勝賀
▽同決勝
附属高松 14（12－5、2－5）10 桜町
▽女子準々決勝
光洋 11－4 山田
香東 22－3 善通寺西
香川 5－4 竜雲
附属高松 21－3 勝賀
▽同準決勝
香東 7－4 光洋
附属高松 11－3 香川
▽同決勝
香東 8（5－0、3－2）2 附属高松
（注）この大会の勝者は第1回全国中学生大会の四国代表に認定された。四国代表選考会に他の3県が棄権したためである。

▼北陸3県中学大会〜兼第1回全国中学生大会北信越代表選考会〜（8月・富山）
▽男子リーグ
御幸（石川）10（5－3、5－3）6 光陽（福井）
光陽 13（5－6、8－5）11 氷見南部（富山）
氷見南部 19（9－4、10－5）9 御幸
【順位】①氷見南部（得30、失22）②光陽（得19、失21）③御幸（得19、失25）
▽女子リーグ
丸内（石川）13（6－1、7－0）1 般若（富山）
丸内 16（9－0、7－0）0 成和（福井）
般若 12（6－5、6－7）12 成和 引き分け
【順位】①丸内②般若③成和

◆第26回愛知県中学校総合体育大会ハンドボール（8月・蒲郡）
▽男子準々決勝
一宮南 16－9 葵
羽田 15－10 東海
東港 11－7 一宮北
三谷 13－11 笹島
▽同準決勝
羽田 11－10 一宮南
東港 10－6 三谷
▽同決勝
東港 19（10－1、9－4）5 羽田
東港中（名古屋）は初優勝
▽女子準々決勝
豊橋南 22－3 尾西一
明豊 9－7 乙川
笹島 13－11 牟呂
上野 10－9 三谷
▽同準決勝
豊橋南 6－1 明豊
上野 11－7 笹島
▽同決勝
上野 12（7－5、5－3）8 豊橋南
上野中は7度目の優勝

【訂正】本誌101号30頁第15回近畿高校男子準々決勝第4試合の記録を次のように訂正します。
都島工（大阪）6（4－1、2－3）4 乙訓（京都）

【お詫び】本誌101号10頁中大付ー麻生のテーブルは脱字が多く次のとおり再録します。

得	【中大】	
0	松下	K
0	西川	
11	蒲生	F
3	佐藤	
1	大林	
0	竹内	
0	安	
0	坪子	
2	森	
0	浦野	
0	石川	
0	林	
17（1）		

編集後記

▽……オリンピック。日本代表は健闘むなしく11位でした。選手の皆さん、御苦労さまでした。

いろいろな反省の声が聞かれます。そのなかで我々がいちばん考えなおしてみなければならないのは、「上位入賞」という十字架を選手に背負わせすぎたのではないか、ということです。

▽……もういちど日本ハンドボール界を一から見つめなおすべきだという意見にも大賛成です。

卒直にいって斯界は大所、高所での発言が乏しすぎます。

「それでいながら他のスポーツとの比較を気にする」とはハンドボール界をよく知るスポーツライターの直言です。

35年の球史、オリンピックへの参加。〝おとな〟にならなければなりません。小さな器から大きな器への成長、それが唯一無二の〝ミュンヘンの遺産〟ではないのでしょうか。

▽……今回の結果いかんにかかわらずこの大会が斯界の歴史の〝ある境目〟になることは予測されていました。オリンピック出場を35年の結晶とするか、新しい球史の出発点とするかという問いかけに多くのかたは後者を選びました。

新しい目標に向かってすでに歩みは開始されたのです。

（杉）

日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第一〇二号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可
昭和四十七年九月二十五日印刷 昭和四十七年一〇月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一ー一ー一 電話 大代表(467)三一二一 振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価二百円(年間購読料千八百円)